中村家住宅調査報告書

２０１５年２月

福井県南越前町教育委員会

中村家住宅調査報告書

２０１５年２月

福井県南越前町教育委員会

(1) 中村家住宅 主屋・新座敷 正面

(2) 主屋・新座敷（背後から見る）

PL.2

(1) 土蔵群（左から米蔵・前蔵・正門・バンゲ蔵・西蔵）

(2) 河野浦集落の景観（手前：南ノ町、奥：北ノ町）

(3) 旧村道（北側から見る）

(1) ニワ（オイエ方向を見る）

(2) オイエ（ナンド方向を見る）

PL.4

(1) 中の間・式台

(2) 中の間・次の間・本座敷

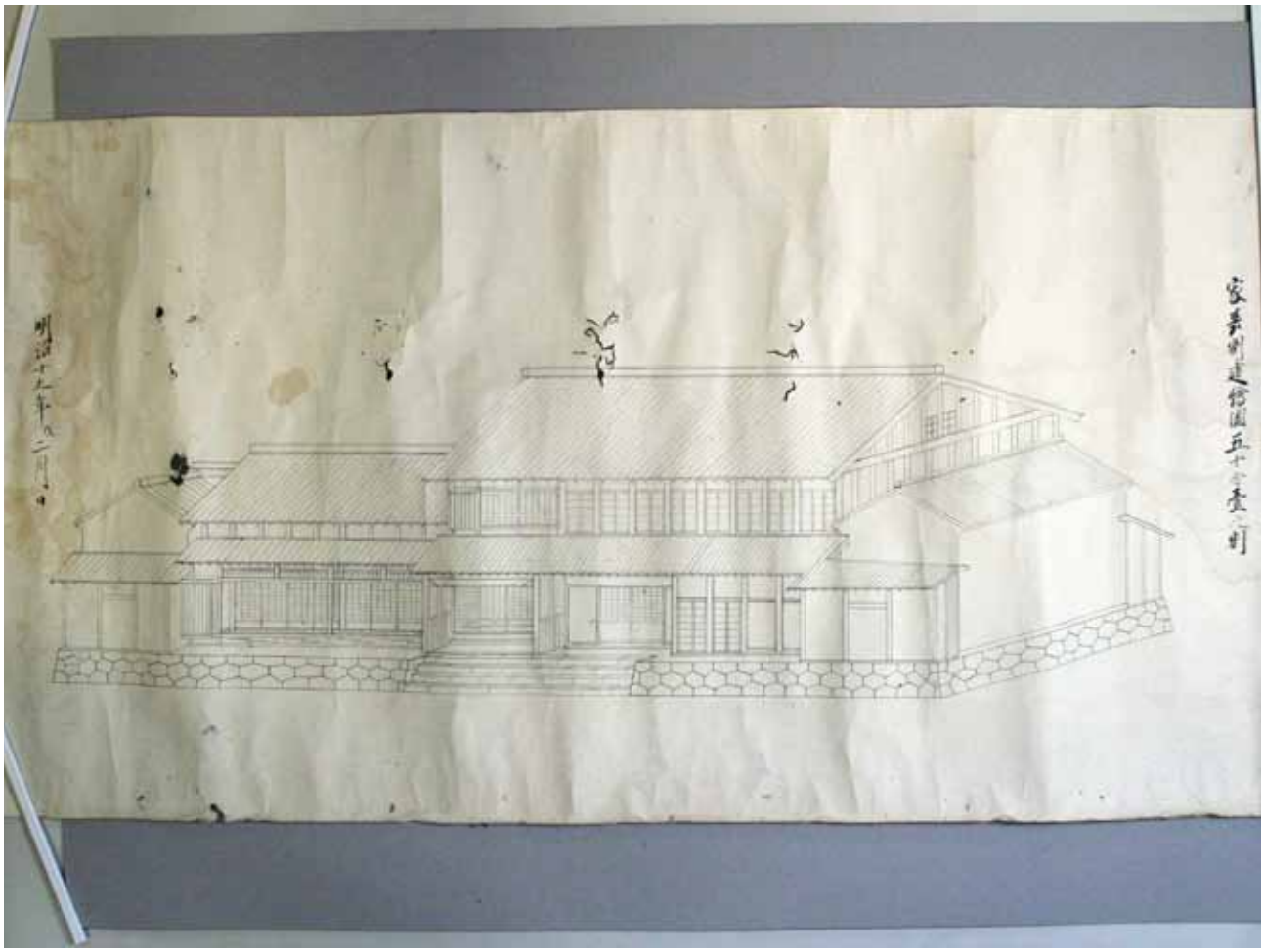
(1) 本座敷 床構え

(2) 休足の間

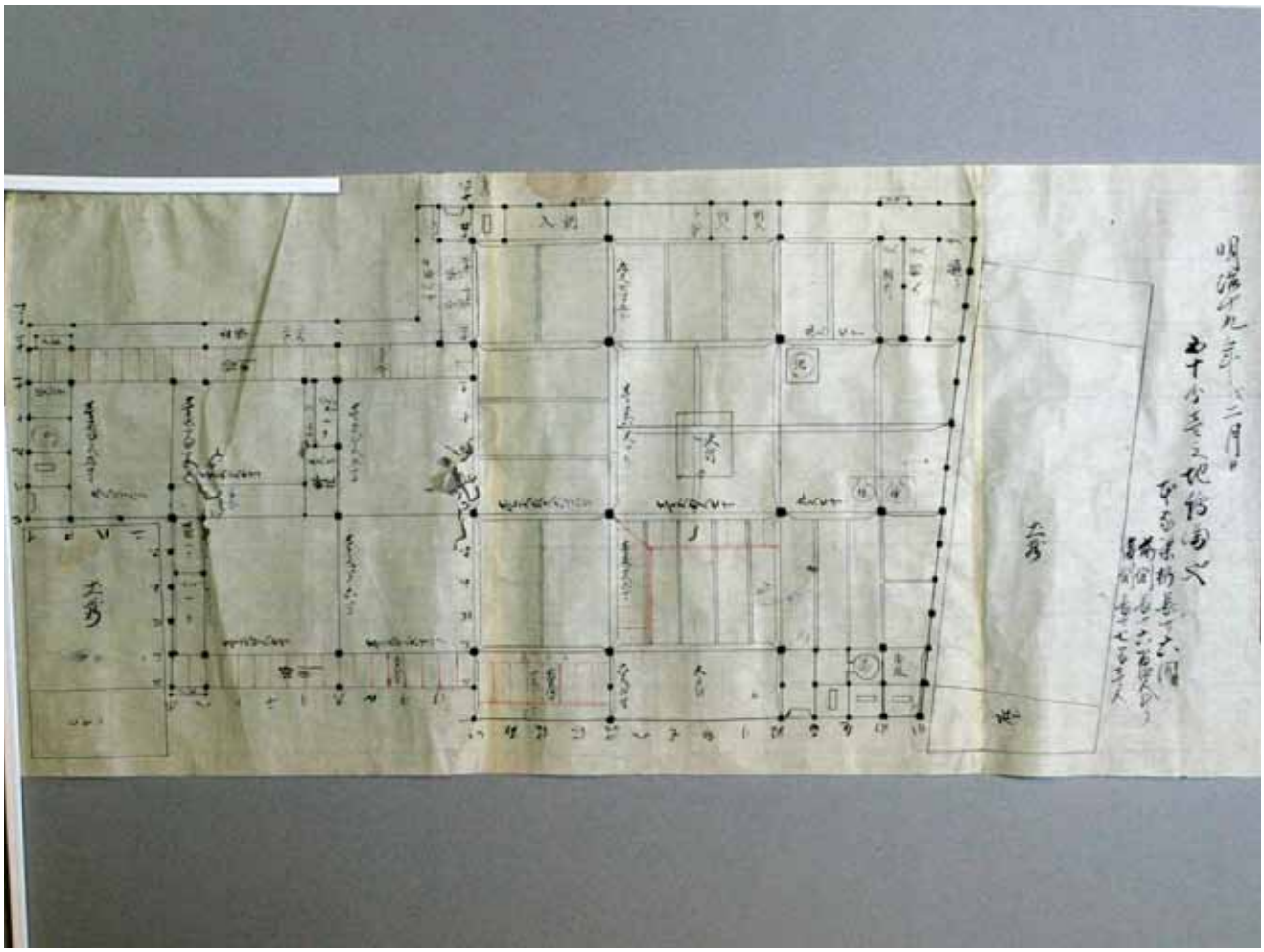
(3) 裏 2 階 洋風階段（新座敷方向を見る）

(1) 新座敷 2 階 次の間・主座敷（海側を見る）

(2) 新座敷 3 階 望楼座敷



(1)「家表側建絵図 五十分壱之割」（明治 19 年）



(2)「五十分壱之地絵図」（明治 19 年）

PL.8

ダイドコロ（新座敷方向を見る）

南越前町文化財調査報告　第４集

中村家住宅調査報告書

２０１５年２月
福井県南越前町教育委員会

序

中村家住宅が所在する南越前町河野は、越前海岸の南端、敦賀港の入口に位置します。河野浦は、越前西街道（馬借街道）を通じ国府と直結する港であったことから、敦賀港との物資輸送の中継地として古くから海運との関わりがあった集落です。そして、北前船が日本海を駆けめぐり大阪と北海道の間を交易した時代には、多くの北前船主を輩出しました。船主などの邸宅が建ち並ぶ「北前船主通り」の家並みは、今でも往時の繁栄を偲ばせてくれます。

中村家は、藩政時代には上使宿をつとめた家柄で、幕府の巡見使や福井藩主が度々当家を訪れています。一方、北前船の時代にはいち早く廻船業に乗り出し、河野浦で同じく船持ちであった右近家とともに、日本海五大船主の一家に数えられる程の成功をおさめました。

建築当初の姿をよくとどめている当家住宅は、これまで福井県史や福井県近代和風建築総合調査において、独特の北前船主館として紹介されてきましたが、その後の調査において約 4 万点におよぶ古文書が発見されました。この史料により、当家住宅の新築・増改築の過程などについて、建築と文献史料の両面からの考証がなされ、当家住宅の価値をさらに高めることとなりました。

こうした北前船の繁栄を物語る建築や、それによりもたらされた文化は、私たちの祖先が築いた文化財であり、地域の歴史や文化を今日に伝え、地域の個性を生み出しています。本書に掲載した各種調査の記録や収録した図面・写真が、そうした文化財に対する理解を深め、当家住宅の保存・活用に向けての一助となれば幸いです。

最後になりましたが、長期にわたる当家住宅の調査及び本書の執筆にご尽力賜りました吉江勝郎先生をはじめ、文化庁、福井県生涯学習・文化財課、福井県立歴史博物館からは多くのご指導・ご助言を賜りました。そして、ご理解とご協力をいただきました中村家ご当主のほか、関係各位に対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成 27 年 2 月

南越前町長　川野 順万

目　次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1．調査の目的
　2．調査の方法と内容
　3．調査の組織と経過
　4．報告書の作成

Ⅱ　北前廻船と没落の激しい北前船主 …… 4

Ⅲ　河野の地勢と地理 …… 6

Ⅳ　河野浦と北前船 …… 8

Ⅴ　河野浦集落と船主館 …… 11

Ⅵ　中村家住宅の建物 …… 13
　1．中村家の歴史と家屋敷
　2．各建物の概要
　　(1) 主　屋
　　(2) 新座敷
　　(3) 土　蔵
　　(4) 正門・中門・塀

Ⅶ　中村家住宅の変遷 …… 22

Ⅷ　主屋座敷の意匠特性 …… 31

Ⅸ　まとめ …… 33

参考文献 …… 35

図　版

図　　版

表　　紙

表　「家表側建絵図 五十分壱之割」トレース　　裏　「冬青舎」（松平春嶽 揮毫／主屋「次の間」の額）

カラー図版（巻頭）　PL.

1 (1) 中村家住宅 主屋・新座敷 正面
(2) 主屋・新座敷
2 (1) 土蔵群
(2) 河野浦集落の景観
(3) 旧村道
3 (1) ニワ
(2) オイエ
4 (1) 中の間・式台
(2) 中の間・次の間・本座敷
5 (1) 本座敷 床構え
(2) 休足の間
(3) 裏２階 洋風階段
6 (1) 新座敷２階 次の間・主座敷
(2) 新座敷３階 望楼座敷
7 (1)「家表側建絵図 五十分壱之割」
(2)「五十分壱之地絵図」
8 ダイドコロ

モノクロ図版　PL.

各建物外観

9 (1) 主屋・新座敷
(2) セドクラ・新座敷
(3) 主屋南側の屋根
10 (1) 主屋正面大戸口
(2) 式台
11 (1) 新蔵
(2) セドクラ
(3) バンゲ蔵・西蔵
(4) 西蔵正面
12 (1) 前蔵・米蔵
(2) 浜蔵・塩物蔵
13 (1) 正門
(2) 北塀
(3) 石垣
14 (1) 河野浦集落の景観
(2) 海側から見た屋敷地

主屋内部

15 (1) ニワ
(2) 中の間
16 (1) 次の間
(2) 本座敷
17 (1) 前庭・西側縁側
(2) 仏間
18 (1) 隠居間
(2) 湯殿
(3) ダイドコロ
19 (1) オイエ
(2) ナンド
(3) コエン
(4) 庭園・東側縁側
20 (1) 表２階 座敷８帖
(2) 表２階 座敷６帖
21 (1) 東２階 座敷６帖
(2) ミズヤ・洋風階段

新座敷内部

22 (1) 新座敷１階 主座敷
(2) 新座敷２階 次の間
23 (1) 新座敷２階 主座敷
(2) 新座敷３階 望楼座敷

土蔵内部

24 (1) 新蔵２階
(2) セドクラ１階
(3) 西蔵１階
(4) 西蔵２階
25 (1) バンゲ蔵２階
(2) 前蔵２階
(3) 米蔵１階
(4) 米蔵２階
26 (1) 塩物蔵１階
(2) 浜蔵２階
(3) バンゲ蔵 納戸
(4) セドクラ正面

図　　面　PL.

27 屋敷屋根伏図（配置図）（1/250）
28 １階 全体平面図（1/250）
29 主屋１階 平面図（1/200）
30 主屋２階 平面図（1/200）
31 新座敷及びセドクラ１階平面図（1/100）
32 新座敷及びセドクラ２階平面図（1/100）
33 新座敷３階 平面図（1/100）
34 新蔵 平面図（1/100）
35 西蔵及びバンゲ蔵 平面図（1/100）
36 前蔵及び米蔵 平面図（1/100）
37 塩物蔵及び浜蔵 平面図（1/100）
38 正門 平面図（1/100）

Ⅰ　調査の概要

1．調査の目的

はじめに　北陸の北前廻船業は、江戸中期に成長し 19 世紀になって急速に発展した。そして、明治の初めに最盛期を迎えるが、明治後期には衰えだし、大正期には姿を消していった。つまり、貨幣経済の進展、綿・ナタネ・アイといった商業作物の栽培、鰊・〆粕といった金肥の需要、北海道の開発と北海の産物の流通といった近代への産業界の歩みは、北前廻船業を急激に進展させた。やがて鉄道や大型船舶による輸送、電信など情報の普及といった交通・通信の近代化や、大豆粕・化学肥料の輸入と国内製造などによって衰退の途を辿り、最盛期はおよそ 100 年ほどであった。しかし、北前廻船業は地方とその地域に莫大な富をもたらした。富を手にした北前船主は、きまって豪壮な家を建てた。北前船主のみならずその分家、船頭など、次々と立派な家を建てていったのである。狭い町に、幾人もの北前船主の成功者が生まれ、かたまって富が集中し、競って立派な家が建設されたことから、地方とその地域にその街村特有な北前船主の家の型も生まれた。しかしその多くは、北前廻船業の衰退とともに北前船主が没落、その館も多く消滅した。その中で、今も残された船主の家や、近代期への事業転換を行い経営発展を果たせた船主住宅の遺構を、「北前船主館」と称する。中村家住宅は、敦賀港口に位置する河野浦に興った北前船主館である。

調査の目的　本調査報告書は、平成 21 年度から 23 年度にかけて行われた福井県近代和風建築総合調査と、その後の補足調査の成果に基づき、中村家住宅の価値を裏付ける学術的根拠をまとめ、歴史的建造物としての保存の意義を明らかにすることを目的とする。

２．調査の方法と内容

調査は、以下の方法と内容により実施した。

建築調査　近代和風建築総合調査における調査成果をベースにして、未調査部分の実測調査を行い、配置図及び全建物各階の平面図を作成した。主屋の２階部分と新座敷の２階・３階部分を補足し、これまで未調査であった７棟全ての土蔵内においても、所有者立ち会いのもと実測調査を行った。

史料調査　今回の調査を進めていくなかで、主屋及び各土蔵内からおよそ４万点（保管箱130 箱分）に及ぶ古文書等の史料が新たに発見された。それらの史料については、福井県立歴史博物館協力のもと、発見後随時同館へ運搬して燻蒸処理を施し、整理・保管を進めていった。本調査では、建物の建築年代などを検証するため、普請関係資料の抽出作業を行い、現段階で絵図面類 18 点、普請関係文書 23 点、古写真２点が確認されている。

なお、平成 25 年 11 月には「中村家文書調査委員会」（事務局：福井県立歴史博物館）が設置され、主要文書の目録作成のための調査が現在も行われている。

写真撮影　フルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用し、屋内での撮影においてはカメラ付属のフラッシュではなく、単体照明機材を用い撮影を行った。撮影した写真はキャビネ版で紙焼きし、データ（RAW、TIFF、JPEG）はアーカイブ DVD に収録した。収録カット数は、各建物の外観で 25 カット、主屋内部の諸室で 37 カット、新座敷内部の諸室で７カット、土蔵内部の各階で 19 カットの計 88 カットに及んだ。

３．調査の組織と経過

本調査は、南越前町教育委員会を事務局とし、文化庁文化財部参事官付（建造物担当）及び福井県教育庁生涯学習・文化財課の指導のもと以下の体制によって行われた。

調査員

吉江 勝郎（日本建築専門学校－福井工業大学）
千木良 礼子（福井県教育庁生涯学習・文化財課）〈調査当時〉
今出 瑞穂（福井県教育庁生涯学習・文化財課）
山形 裕之、久角 健二（福井県立歴史博物館）
平野 俊幸（全国北前船研究会）

調査協力者

中村 日出男（中村家当主）
寺下　貢（河野区）
長島 清高、山本 朋弘（福井工業大学大学院）〈調査当時〉
柳沢 芙美子（福井県文書館）
中村家文書調査委員会（委員長：京都大学名誉教授 藤井 譲治）

写真撮影

武藤 茂樹（武藤写真館）

事務局

玉村 幸一、前川 小鉄、細丸 妙子（南越前町教育委員会事務局）

調査経過

平成 25 年

6 月 1 日～ 2 日／第 1 次調査／吉江、千木良、今出、山形、久角、玉村
新蔵、西蔵、バンゲ蔵、セドクラを調査。新蔵内に保管されていた資料群を確認。

6 月 15 日／第 2 次調査／吉江、玉村
建築調査。米蔵、塩物蔵、浜蔵を調査。浜蔵 2 階で新出史料（長持 2 箱ほか）を発見。

6 月 23 日／第 3 次調査／久角、平野、今出、玉村
史料調査。浜蔵 2 階で確認された史料の持出し・運搬。

7 月 1 日／第 4 次調査／吉江、千木良、今出、玉村
建築調査。新座敷床下などを調査。主屋屋根裏で新出史料（長持 1 箱ほか）を発見。

7 月 12 日／第 5 次調査／山形、久角、玉村
史料調査。主屋屋根裏で確認された史料の持出し・運搬。

8 月 7 日／第 6 次調査／山形、久角角、平野、玉村
史料調査。これまでの新出史料から普請関係文書を抽出（福井県立歴史博物館）。

11 月 11 日　写真撮影／武藤、今出、玉村
ロケハン撮影。各建物の外観、内部の各部屋ごとに撮影アングルを検討し試撮。

11 月 25 日～ 27 日、12 月 5 日　写真撮影／武藤、今出、玉村、前川、細丸
本撮影。建物外観 25、主屋内部 37、新座敷内部 7、土蔵内部 19、計 88 カット。

12 月 6 日／第 7 次調査／山形、久角、平野、玉村、細丸
史料調査。新蔵 2 階の帳箪笥及びその周辺で新出史料数千点を発見し、持出し・運搬。

平成 26 年

3 月 7 日　写真撮影／武藤、今出、玉村、細丸
再撮影。新座敷 2 階、表 2 階座敷。

3 月 19 日／第 8 次調査／吉江、山形、今出、玉村
史料調査。12 月 6 日新出史料から普請関係文書を抽出（福井県立歴史博物館）。

5 月 1 日／第 9 次調査／中村家文書調査委員会、山形、玉村
史料調査。数十点の新出史料を確認。

5 月 14 日／第 10 次調査／山形、玉村
史料調査。新出史料から抽出した普請関係文書の写真撮影（福井県立歴史博物館）。

6 月 2 日／第 11 次調査／山形、玉村
史料調査。新出史料から抽出した普請関係文書の写真撮影（福井県立歴史博物館）。

9 月 17 日／第 12 次調査／山形、玉村
史料調査。新出史料から抽出した普請関係文書の写真撮影（福井県立歴史博物館）。

10 月 30 日／吉江、今出、玉村
文化庁 上野 勝久 主任文化財調査官 指導

4．報告書の作成

本報告書は、吉江 勝郎（日本建築専門学校 校長）が本文を執筆し、図面作成を行った。編集及び図版作成は、玉村 幸一（南越前町教育委員会事務局 学芸員）が行った。

Ⅱ　北前廻船と没落の激しい北前船主

「北前船」は北国の船主の持船で、日本海から下関をまわって瀬戸内や大坂港に入港した日本海諸港の船を、瀬戸内・阪神地方の人たちがそう呼んだことに由来する。18 世紀初めの北前船には、それまでの北国船、ハガセ船に代わり元禄期 (17 世紀末) に瀬戸内に起こった弁才船が多く用いられた。しかし明治 10 年 (1877) 頃になると、多くの帆を用いた西洋型帆船や、ベザイ船体で一部を西洋風に改良した合の子船が用いられた。やがて明治 20 年代に汽船が用いられるようになるや北前船時代も遂に終焉を迎えることになるのである。そうした日本海海運を支配していたのは、近世初期から中期にかけては上方船であったが、文化・文政期を境にその主力は山陰・北陸地方の廻船に代わる。そして、文化 10 年 (1813) から文政 5 年 (1822) までの 10 年間に越前・若狭の主要湊から爆発的に北前船が日本海に繰り出され、日本海海運の全盛時代となった。

もっぱら運賃積み収益によっていた初期北前廻船業も、やがて競争激化し、さらに買積み方式になる。北前船の特徴はその商売方法で、日本海と瀬戸内海をつないで、大坂と北海道（近世の蝦夷島）との間（西廻り航路）を商売しながら廻ぐる買積船で、船主は自分の荷物を各港で売買しながら廻ぐる北前船商人である。その大きな利益が北前船を投機や投資の対象とした多くの船主を発生させた。寛政 9 年 (1797) から明治 42 年 (1909) 間の「廻船（北前船）を持っていた旧船主数一覧」によると、福井県内の船主数は 1,109。その内訳は三国 155、新保 111、敦賀 120、小浜 42 で、多くの船主は越前若狭の漁村（892）から出ていた。一見利益が大きいものの、遭難の危機遭遇と商才にたけ、豊富な資金量を要した北前廻船業は一度の航海で破産するものが多く、運よく 2 ～ 3 年か 4 ～ 5 年続けばよく、多くは没落を余儀なくした。そうした中、福井県内の三国湊、敦賀湊、小浜湊は北前寄港地として繁栄した。そこに多くの船主が生まれた。

敦賀湊は日本海側最良の港で、江戸時代までは京阪神に通じる荷物の中継地とした繁栄を誇り、各藩の蔵宿とともに、道川三郎左衛門、高島屋傳右衛門などの船主で蔵宿も兼ねた豪商がいた。しかし寛文・元禄をすぎた 17 世紀末に西廻り航路の定着とともに、敦賀は単なる地方港に衰退する。そうした中、吉田屋伊兵衛、岐阜屋吉兵衛、綱屋甚助、油屋庄左衛門、綱物屋長左衛門、小間物屋長左衛門、江戸屋源太夫、大酒屋新右衛門、角野重兵衛、佐渡屋利三郎、田中屋孫右衛門、高島屋久兵衛などといった船主が現れていた。その敦賀港口に位置する糠、甲楽城、今泉、河野には 21 軒の船主がいた。河野には泉屋七三郎、板谷六左衛門、中西仁兵衛、酒屋久治郎、山田冶右衛門、岡崎栄治郎の船主がいた。没落の激しい北前廻船業の中で生きのび、成功者となるものが現れていたが、天明頃より現れ現存する北前船船主が右近権左衛門・中村三郎右衛門両家である。

右近・中村両家は敦賀港口に位置する河野浦で、江戸時代から 1 ～ 2 艘の船を持ち、長い経験と豊富な資金によって、幕末から明治中期にかけて、激増する北前船主のなかで生きのびた。覇者となり、一時代をもたらした北前船主の家業繁栄は特徴的で、その住家、北前船主館をもたらしていた。中村家住宅はそうした近代和風建築の遺構である。

そして、右近・中村両家とその一翼であった刀禰家の繁栄は、多くの水主を輩出した河野浦地域に特徴的な北前船集落をもたらし、北前船時代の集落繁栄を誇った。

河野浦の航空写真（南東上空から見る）

Ⅲ　河野の地勢と地理

北前船主館のある南越前町河野地区（旧河野村）は、大谷区、大良区、菅谷区、河内区、具谷区、赤萩区、河野区、今泉区、甲楽城区、糠区、八田区、杉山区、神土区からなる。

日本海を臨む越前海岸の越前町米ノ浦干飯崎から南越前町大谷にかけての直線状の断層（甲楽城断層と呼ぶ）海岸地形は、断層崖が海に落込み、極めて険阻である。すなわち、断層崖を形成する断層海岸の特色は、傾斜角 30 ～ 40 度の急斜面から東南にかけて狭小なことである。その断層崖下の狭小な帯状の浜に沿って、北より糠、甲楽城、今泉、河野、大谷の 5 集落が点在する。

船主館の遺構がある河野区は敦賀湾入口に位置する。現南越前町役場河野総合事務所付近を境に、北側の集落を元村、その南部、尾合根地区を出村という。この元村を往古より“河野浦”と呼んできた。河野浦のほぼ中央には、文明 3 年 (1471)、本願寺 8 世蓮如が吉崎御坊へ下向の際、近郷の総社「やはた八幡宮」の神官であった松川右近が教化を受け一向宗（浄土真宗）に帰依し創建したと伝えられる金相寺がある。その北方を北ノ町、南方を南ノ町と呼んでいる。現在、元村と呼ばれている河野浦は、往時より金相寺を中心に、上ノ町、北ノ町、南ノ町（道ノ上、道ノ下に分ける）に区画されている。

北前船主館は、北ノ町に中村三之丞家・刀禰新左衛門家、南ノ町に右近権左衛門家の 3 家がある。北ノ町は、伊予国守護河野通治の末裔と称する中村三之丞家（中村三郎衛門家）から北側に展開し、通りの北隣りに元禄期に新地分家した中村吉衛門家が居を構え、さらにその北に刀禰新左衛門家が居住する。一方、中村三之丞家と金相寺との間にはかつて新谷弥右衛門家があった。南ノ町の南端には右近権左衛門家がある。そして、上ノ町の東方山中には、中村三之丞家と右近権左衛門家を眼下に臨み、河野浦に向かって鎮座する村社八幡神社の末社磯前神社がある。

尾合根と称する地区は、南方あまごぜ山の尾根と東方矢良巣岳の尾根が下って合わさる地点に位置し、「やはた八幡宮」の遷宮が置かれた神域で、神田・別当両社家領であったため、河野川河口に当たり、村内で最も平坦地が拓けたのにもかかわらず、明治に至るまで住家はなかった。明治 6 年 (1873)、武生＝河野間の陸運、河野＝敦賀間の海運の中継地になるや、新開地として元村からの移住者・新住者が出現し、今日に至っている。背後の八幡山には、河野村社で御祭神を品陀和気命とする八幡神社が鎮座する。その麓には、贅を尽した中村三之丞の分家 中村新屋家住宅や、右近権左衛門家の分家 右近良助家住宅の遺構がある。そして、尾合根の口には、御影石を積み石垣を廻らした大名の霊廟を思わせる右近家先祖代々の墓所が置かれ、右近家の繁栄を伝えている。

北前船主の集落繁栄は、村社八幡神社やその末社磯前神社の贅を尽くした改築普請にも見ることができる。村社八幡神社の明治 45 年 (1912) 改築は「本殿は間口七尺、奥行六尺。拝殿は間口四間半、奥行二間。渡殿は間口一間半に奥行一間半のもので、建物は精巧佳麗なもの」（『河野村誌』）である。参道には右近・中村両家取引先 47 名の寄進による明治 35 年 (1902) 建立の木造鳥居や、右近権左衛門及び同船頭中の寄進による花崗岩製鳥居が社前階段に建つ。ほかに右近・中村両家取引先 47 名の寄進の玉垣、石造献燈や、船主や船頭水夫たちが寄進した手水舎、水船、幟立、石造駒犬、大理石献燈が置かれている。そ

して、社殿に向かって左側には多くの絵馬（船絵馬など）が奉納された金毘羅宮、右側に神輿堂が置かれている。河野浦の船主館にはどの家にも豪華な仏壇が祀られていた。それは北前船による財力と篤い信仰心の表れであるが、それはそのまま村社八幡神社やその末社磯前神社の優れた普請をもたらしている。神輿堂に安置された絢爛たる御輿は廻船華やかな北前船主の集落繁栄を物語っている。

河野の祭り（吉田博 画）

河野浦 1930 年頃の風景（椿春二 画）

『北前船と日本海の時代』福井県河野村刊　口絵より抜粋

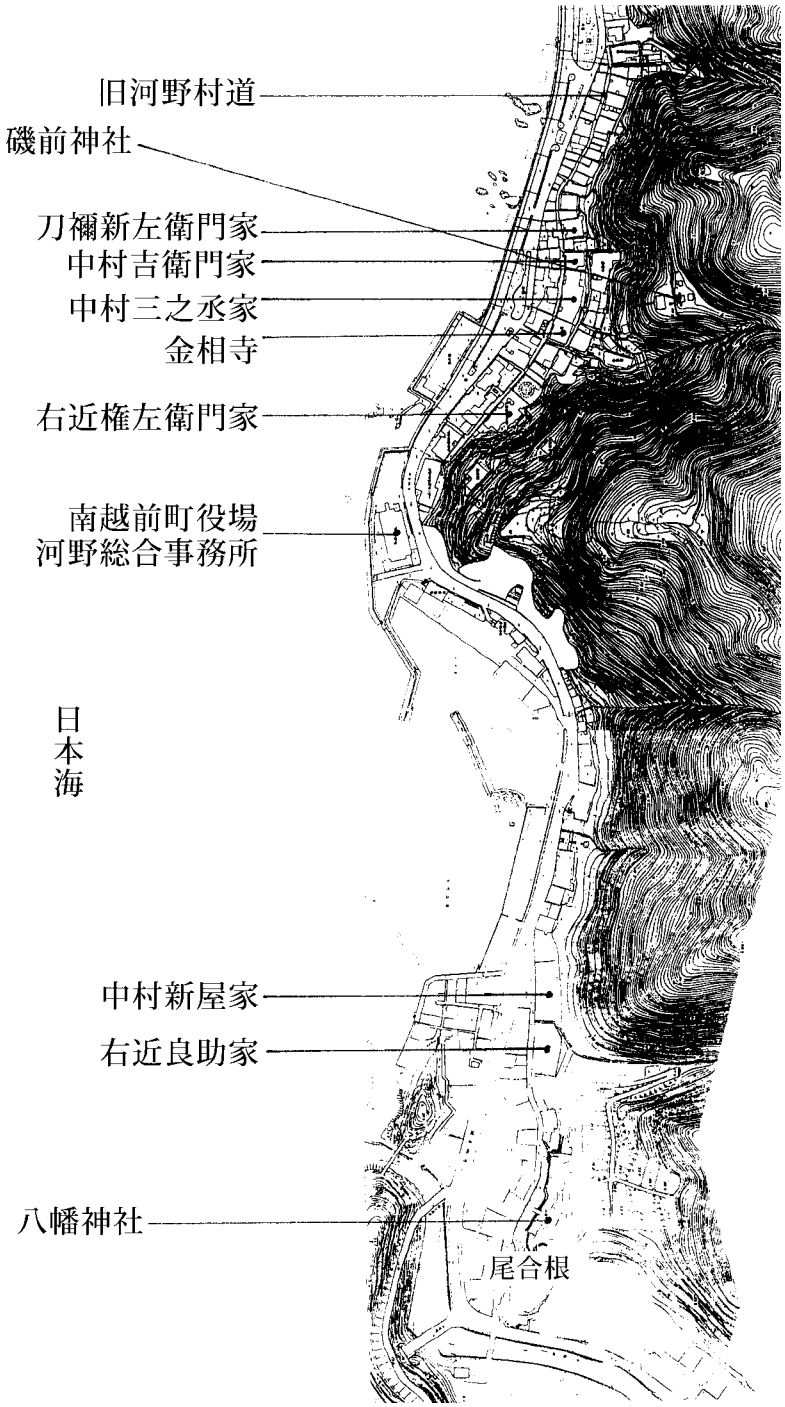


図１　河野浦の主要建物と船主館

Ⅳ　河野浦と北前船

河野浦は江戸時代後期より明治期、日本海五大船主の右近権左衛門、中村三之丞両家の大船主が台頭し北前船主集落を興すが、それをもたらす因果について山形裕之氏が指摘するように「河野浦は敦賀湊を擁する敦賀湾入口に位置し、古代には越前国府（現越前市）へ通じる港であることから、国府の外港的役割を果たしていた。すなわち、河野浦は隣接する今泉浦とともに、府中に通じる西街道の物資輸送に従事する浦馬借の住む村であった。この街道を利用して運ばれた物資は両浦の天渡船によって敦賀湊に輸送された。両浦は府中と敦賀湊を結ぶ中継地として機能した地の利を保有し海運との関わりは 15 世紀まで遡る歴史を有していた。」すなわち、中世末の河野・今泉浦には敦賀湊を拠点に以北の越前海岸諸地域との物資輸送を行う「河野座」「川船座」と呼ばれる船座があった。江戸時代に入ると、敦賀湊を中心として近距離の物資輸送に従事する天渡船以外に松前・津軽方面など北国地方まで航行するような廻船（「他国廻船」）が、今泉浦には登場していた。こうした地理的歴史環境のもとに河野浦の北前廻船業活動が興ってくるのである。

河野浦の北前廻船業の活動を記したのが表 1 である。これによって、幕末から明治初期の河野浦は、正に海運を専業とする船主をはじめ船頭や船乗り（水主（かこ））の居住地として、その住宅が混在した北前廻船集落であり、右近権左衛門家と中村三之丞家がその中核となっていることが分かる。近隣の今泉浦も含め、多くの船主・船頭・水主を輩出し、渡海船稼ぎの黄金時代を招くのである。下記の中村家文書「諸職業鑑札御改メ帳」はその繁栄を示している。

諸職業鑑札御改メ帳

覚　　南条群河野浦

一、渡海船商売　　中村三之丞
　但し松前より大坂迄　　右近権太郎
　　六十郎
　　権三郎
　　喜平治

一、伝渡船　　為吉　以下六人
　三国より敦賀迄

一、船稼　八拾六人
一、黒鍬職　　壱人
一、石灰職　　壱人
一、松前出張　壱人
一、大工職　　壱人
一、無職　　参人
　右之寄人数百人この外男女老女の
　者共畑作家業に御座候

明治三年午三月　河野村長　吉助印

こうした渡海船稼ぎの黄金時代を招く河野浦の事情について、右近純一氏は以下のように指摘する。すなわち、「甲楽城断層崖に位置する村内各浦では、地形上水稲栽培は困難で年貢米はもとより飯米も大量に事欠く。急斜面では開削した下畑や山畑で米以外の穀類と甘薯などを栽培し口すぎをしなければならず、藩制時代ににあっては、とうてい劣勢を免れ得ない土地柄であった。田畑だけでなく、船潤の余地も無く、延宝以降の仕込漁業にも不向きであり、若狭湾を回遊する豊富な魚類をよそに、河野・今泉浦では漁場を村内の他浦へ貸与し、明治期には岩手県南部や越中富山の大謀師にゆだねた。そして、こぞって渡海船稼ぎを業とし、船頭や水主として他船の外に敦賀や小浜港の船主に雇われる。7、8軒の高持ちは山間赤萩村百姓の小作に田地をおろし、船持ちとなる事を願い船稼ぎに専念した。このように船稼ぎを唯一の業として、荒稼ぎをしてきた先人が土着し集落を創り、多少とも船を廻遭することを業として近江商人の荷所船始め天渡船等に寄ってきたことが想像できる。」（「河野浦と渡海船商売」右近純一著）

これはまさに、右近・中村両家を旗頭に北前廻船業を唯一の生業としなければならなかった河野海村集落の地理的歴史環境がもたらした姿と云えよう。それが没落の激しかった北前廻船業の成功者となり、日本海五大船主の内の２船主をうむ北前廻船業成功者の居住地集落になった要因なのである。

現在の河野浦集落

昭和初期の河野浦集落

右近家住宅（北前船主の館 右近家）

旧右近家住宅 西洋館

表１　河野浦北前廻船業年表

享保14年（1729）	河野浦に36艘の船があった。 （享保14年の「他国廻船」の史料）
宝暦11年（1761）	河野浦に紫船－15艘、弁才船－4艘、北国船－1艘の船があった。 （河野浦の船数を書き上げた史料）
元文～宝暦期 （1736～64）	「鰊荷所」を運んだ船主の中に、中村三郎右衛門や右近権左衛門など河野浦の船主の名がある。 （近江商人西川伝右衛門の史料）
天明～寛政期 （1781～1800）	河野浦の船主は、荷所船の船主として運賃積みによる廻船経営を行いながら、自ら仕入れた商品の売買によって利益を得る買積み経営も行うようになった。 （右近家の経営帳簿に荷所運賃と買積みによる収入記載がある）
寛政10年（1798）	四百石積の弁才船が河野浦に4艘あり。 右近権左衛門－1艘、中村三郎右衛門－3艘の船を所有していた。
文化4年（1807）	右近家は五百石積の弁才船1艘、中村家は六百石積の弁才船2艘を所有。その他5～9人の天渡船の船主がいた。
文化15年（1818）	河野浦は「往古は村方も担応の所柄にて渡海船（「他国廻船」）も数多有之、村中船稼第一を以、賑々敷渡世仕候」と記されている。 この他国船は、江戸前期に松前蝦夷地に進出した近江商人がその地の鰊（ニシン）などの蝦夷地産物（「荷所荷」）を敦賀、小浜湊へ輸送するために共同雇用した廻船、すなわち「荷所船」として松前と敦賀・小浜間を往来した運賃積み廻船であった。
	河野浦で難破破船や「売損」で潰れた船主が多く出て、同浦は年貢収入に困り果てていたことが記されている。 （文化15年の史料）
寛政年間～明治初年 （1789～1868）	船持以外の河野浦住人の多くは、船乗りとして雇用されていた。 「万歳帳」（河野浦庄屋の記録帳）には船乗りに雇用された数は延べ405人。そのうち約9割が敦賀・小浜の船主に雇用されている。（そのピークは寛政～文政期。）と記されている。
嘉永以降（1848～）	右近・中村両家が急激に持船数を増加させていった。 右近家の場合、安政元年（1854）には6艘 明治初年（1868）　10艘
	右近・中村両家以外の船主も現れている。 敦賀・小浜の船主に雇用される河野浦の住人が激減する。（地元の船主が多数の船を所有することになり、これに雇用された結果である。）
明治3年（1870）	幕末以降、河野浦では右近・中村両家の船主や船乗が次第に増加した。 河野浦住民総数105名のうち 松前より大阪迄の渡海船商売　－5名（右近・中村両家） 「船稼ぎ」（船乗り）　－86名 「三国より敦賀迄」の「伝渡船」持ち　－7名 同浦の海運従事者は全村民の90％以上を占めていた。 （明治3年（1870）の河野浦住民の職業史料）

（出所）山形裕之著「プロローグ・河野浦と右近家」より作成

Ⅴ　河野浦集落と船主館

河野浦最古の地籍図は、明治 9 年 (1876) の「越前国南条郡河野浦字限地籍絵図」（図 2）である。

当地籍図は、昭和 6 年 (1931) の県道河野線改修工事完成（昭和 47 年、現在の国道 305 号線になる）以前の北ノ町と南ノ町の敷地割・耕地・村道を示す。海岸が集落に迫り、東側断層海岸に沿って南北帯状に集落形成し、現集落の原形を示す。そして、集落の東西ほぼ中央を海岸に沿って南北に通る村道、それを挟んで東西の敷地割が現集落の敷地割基盤となっている。北前船稼商売で成功した南ノ町の右近権左衛門家、北ノ町の中村三之丞家、刀禰新左衛門家、そして、中村家より元禄期に分家した中村吉衛門家の 4 家の屋敷地は、西側（海側）の敷地も所有し、村道を挟み東西の敷地割を占める一郭を形成している。

表 2 は、前述の 4 家の家屋敷図と間口、主屋前の道路幅を示す。敷地中央を貫く旧村道を挟んで、東側（山側）は石積み基壇上に平地を構築し、海側向きに主屋を設けている。船主館は河野浦にあってひときわ大きな間口の家構えをつくる。さらにその前方、道路幅 8 尺 (2.4m) ～ 10 尺 (3m) の旧村道を挟んだ西側（海側）に、旧村道に沿って海を背にして土蔵を連ね、海側に向かって表門を開く門構えは、河野浦の船主館の屋敷構えに共通して捉えることができる。そして、河野浦の船主館は、旧村道側に開く土蔵構えと平入り主屋の家並みがつくる旧村道の町並み景観をつくりだしている。

つまり、旧村道を挟んで、東側に主屋を海に向かって平入りに構え、西側に土蔵を連ねて表門を海に向かって開く河野浦の船主館の屋敷構えは、主屋を潮風から遮り、海側を表構えとする河野浦の特色ある海村景観をつくりだしていることが分かる。そしてそこには、長く海洋に生き、厳しい廻船業にも携わってきた河野人にしか知ることのできない海への畏敬の念が表され、河野浦文化を醸成している。

表 2　船主館の家屋敷図と間口・前面の道路幅

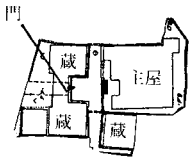
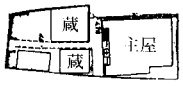
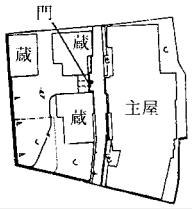
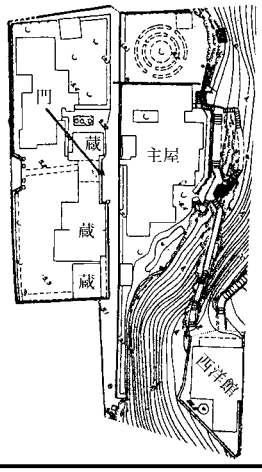
	家屋敷図	間 口	前面道路幅
刀禰新左衛門家		14.2間 (25,600mm)	11.8尺 (3,580mm)
中村吉衛門家		7.4間 (13,400mm)	9.5尺 (2,880mm)
中村三之丞家		24.4間 (44,000mm)	8.4尺 (2,550mm)
右近権左衛門家		50.8間 (91,500mm)	7.8尺(北側) (2,370mm) 10.9尺(南側) (2,850mm)

図２　河野浦の現代地図と「越前国南条郡河野浦字限地籍図」(明治９年)

上段：「北ノ町」と「南ノ町」　下段：「尾合根」地区

Ⅵ　中村家住宅の建物

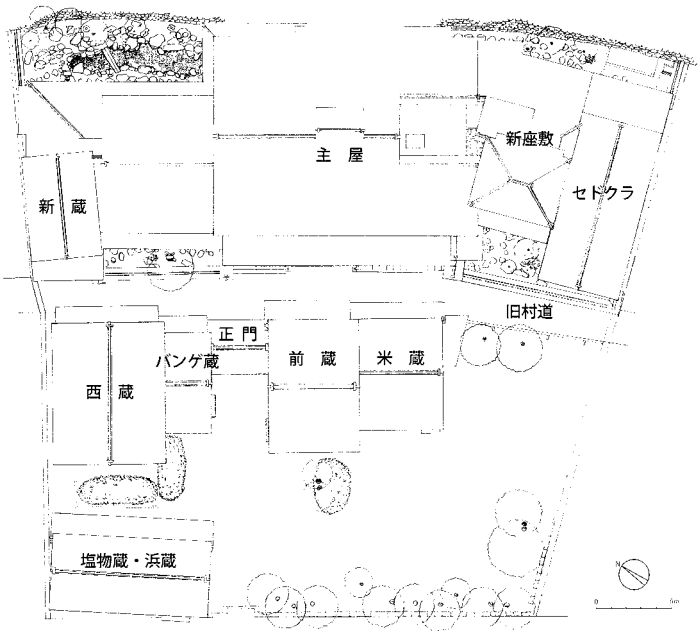
１．中村家の歴史と家屋敷

「中村家は伊予国守護河野通治の流れを汲み、南北朝戦に際し通治の一族は南朝方新田義貞の傘下となって金ヶ崎合戦に参戦し、その後ここに土着、故あって中村と改名して今日に至るとか伝えられる」と河野村誌は記している。中村家の持ち船の旗印で通用印でもある井桁三紋は、伊予の河野家の角切三紋の変形と伝えられている。そして、天明９年(1789) の廻国巡見使三番御宿と、天保９年 (1838) の廻国巡見使の一番御宿をも勤めていた。中村家は、河野浦「高持」８家のうちの一家で、地主として農業を営む一方、江戸時代初期から起る北国廻船業に早くから乗り出す。船持ちとして、寛政年間には 400 石積の弁才船３艘を所有し、幕末から明治中期にかけて激増する北前船主の中で、右近家とともに日本海五大船主に挙げられる隆盛を得たのである。代々、「中村三郎右衛門」を名乗り、明治２年 (1869) より当主の実名「中村三之丞」に改名し、今日に至るのである。

中村家住宅は、河野浦のほぼ中央に位置する金相寺の北隣りに位置する。敷地は東側を石積崖の山地とし、西側を海岸 (現況は埋め立て拡張され、国道 305 号が通る) に、東西およそ 38 m、南北およそ 44 m の台形を呈する。そのほぼ中央を、南北に旧村道（幅員 2.55m）が通る。敷地面積は約 1,040㎡である。背後に山地を負った狭小な地形の南北に通る旧村道に沿って、山側（東部）にはおよそ 60㎝高い石積み基壇上に平地を構築し、間口 24.4 間、海側（西側）に向けて主屋（居宅）を設けている。そして、海側（西部）には旧村道に沿って妻入り・平入りに土蔵を連ね、主屋式台正面に海に向かい格式高い薬医門を開く。こうした当家の繁栄がもたらした豪壮な家屋敷は、近代黎明期の河野の地域文化を反映した特徴的な北前船主の館を生み出している。

建物は、山側には新蔵と平屋建て座敷をもつ２階建て主屋、３層に望楼をもつ増築３階建て新座敷とセドクラ (背戸蔵)、そして、海側の土蔵群（西蔵、バンゲ蔵、前蔵、米蔵、塩物蔵・浜蔵）からなる。土蔵は主屋北側の新蔵と新座敷南側のセドクラ（中村家では瀬戸物を納めた「瀬戸」蔵をセトグラと呼んでいた）を合わせ７棟存在する。

建物の延べ床面積は 617.67㎡（土蔵を含む）である。



建物の配置と名称（1/500）

2．各建物の概要

(1) 主　屋

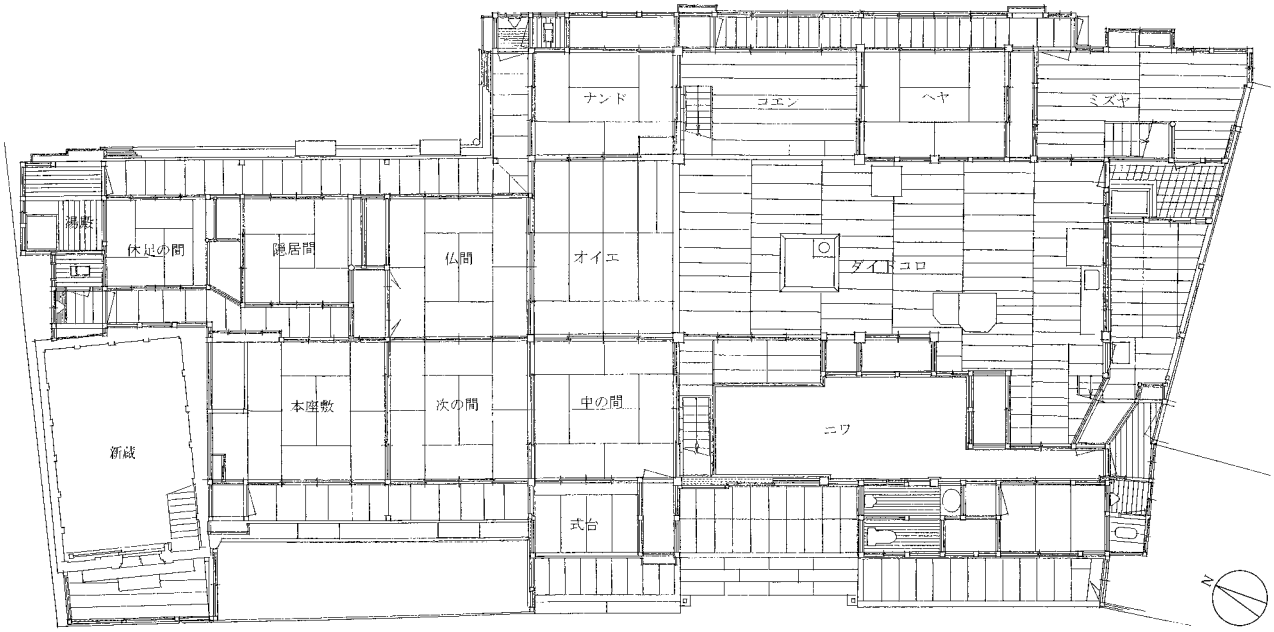
構造形式　桁行 15.871m、梁間 12.376m、2 階建、切妻造、桟瓦葺。
西側に下屋を出し、南側一部を下屋に天窓を開ける。北側に桁行 7.579m、梁間 7.558m、平屋建、切妻造、桟瓦葺の別棟が取り付き、西側、東側に下屋を出す。そしてさらに、北側新蔵の東側に桁行 5.708m、梁間 4.301m の寄棟造、平屋建、桟瓦葺の別棟が取り付く。

規　　模　平面積 346.70㎡（新蔵を除く）

主屋は、新蔵と平屋建て座敷をもつ切妻造り 2 階建。平入り。瓦葺きで、棟には井桁三紋の巴瓦、北前船の帆を入れた雲型跨鬼に立浪型鳥衾瓦が載る。平面は、左手に座敷廻りを採り、右手に板の間を配する構成で、主屋正面は、旧村道より石積みの基壇上に玄関式台と大戸口が並ぶ格式の高い構えをつくる。正面大戸口より入って土間ニワ。その上り縁の先がダイドコロ。その奥の 1 段高い板の間のコエン、ヘヤが続く。一方、ダイドコロの上手には式台に続く座敷 8 室すなわち、中の間、オイエ、ナンド、そして、本座敷と次の間、仏間、隠居間、休足（息）の間を配する。

主屋 2 階建の式台、中の間、オイエ、ナンドと板の間は、伝統的な農家の上普請の象徴である欅普請で、色付け（紅柄塗）を施す。一方、本座敷、次の間、仏間、隠居間、休足の間と増築新座敷は、船主が好んだ栂普請である。

ダイドコロは 2.5 × 6 間。板張りでオイエ側に囲炉裏を切り、その前方ヘヤ側とその背後 2 ヶ所に井戸を置く。ニワ側には 2 口の竈を配する。その背後に流し、薪棚、茶碗棚等を設けている。広いダイドコロとそれを囲む 6 本の基本柱と上部の架構は、火袋を象徴的につくる。すなわち、ダイドコロの中心を形造る 6 本の太い欅柱が、梁間 2.5 間に 3 本



主屋 1 階 平面図（1/200）

づつ前後同じ位置に配置され、互いの柱は上部のサシモン（松丸太）で結ぶ。一方、太い欅柱にはヒラモン（欅材）を渡し、半間間隔に束柱（欅材）を立てた火袋の広く高く豪壮な架構は豪農の造りを誇る。その棟には浜風を避け、煙り出しの小屋根を棟裏側に登らせ開ける。そして、下手妻壁より南光を射る。囲われた大きな火袋は、長い冬を室内で暮らす北陸の風土が生み出したものと考えられる

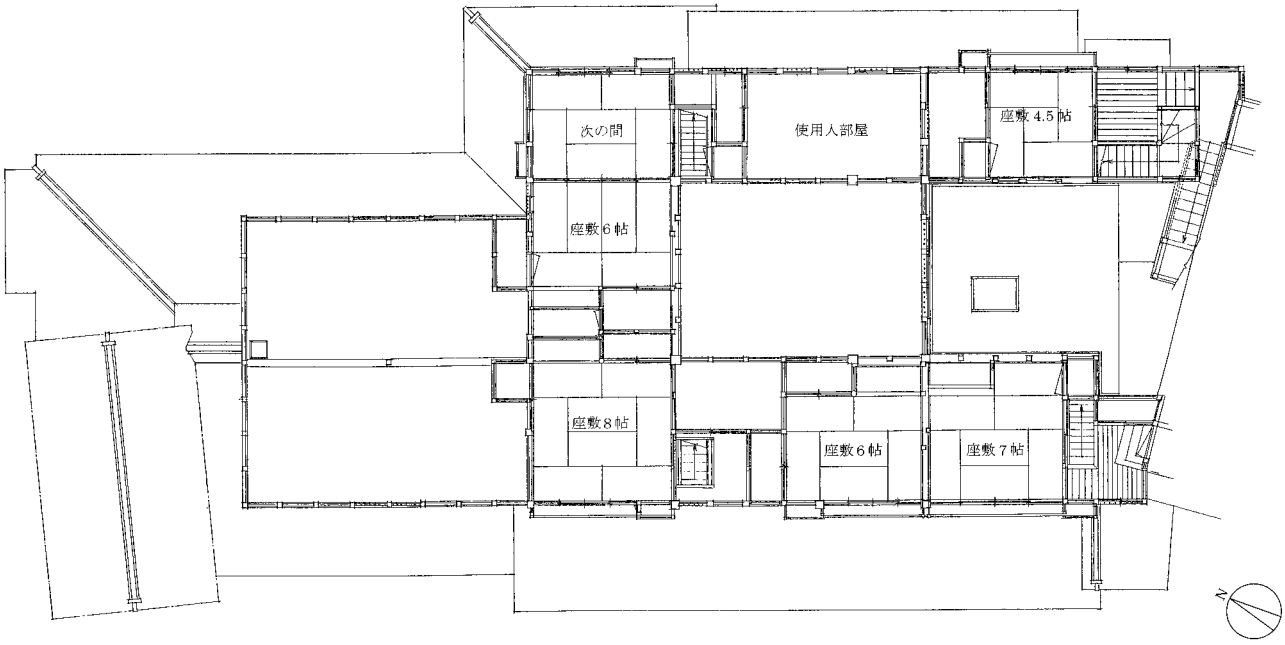
一方、ダイドコロ上手座敷８室は、床を１段高くダイドコロなど板間に対し上座とし、本座敷、次の間、中の間、隠居間、仏間、オイエと３段２列の６室に北側の客間「休足の間」とオイエ東のナンドを付加した間取りで、且つ、中の間、オイエ、ナンドの根太天井に対して、本座敷、次の間、仏間、隠居間、休足の間は竿縁天井とし、上位の座敷としている。

本座敷は８帖。それに次の間８帖、東側仏間８帖と、３室の座敷が鍵型に並ぶ。また、次の間に続く取次の間である中の間、それに表通り（旧村道）基壇上に設けられた式台とからなる玄関構えをとる。そして、本座敷の西側縁側越しに、黐（もち）の木を主木とした前庭を設ける。潮風にも強い黐の木には、「家のもちがいいように」との意味が込められていると、河野浦地域には伝えられている。

本座敷の東側は中廊下で、隠居間、休足の間に伝い、休足の間に湯殿と便所が付設する。そして、次の間の東側に接して設けた仏間と隠居間、休足の間の東側の縁側越しに主庭を設ける。そこには、東側山地を拓き、高く廻らさた石垣堤に沿って、南北に湧水を用いた池泉の庭を凝らしている。

ダイドコロ上手のオイエは当主家族の食事場で、床を１段高く無目框、そして、無目鴨居を入れた十畳間。当主の居室であるナンド、仏間、中の間と接する。ナンド側欅太柱（8.9寸角）に沿って板畳（欅板）一畳を入れ、ナンド側に戸棚を設える特異な水屋構えをつくる。板畳は、ダイドコロ側から給仕を行うための配膳板である。そして、ダイドコロの奥は、使用人たちの食事場であった７畳半の板間コエンとなる。

主屋２階は、東２階の「座敷６帖」「次の間６帖」「使用人部屋」と表２階の「座敷８帖」「座敷６帖」「座敷７帖」、裏２階の「座敷４畳半」からなる。ダイドコロの四方には階段



主屋２階 平面図（1/200）

を設け、主屋２階の諸部屋をダイドコロ上部の大きな火袋を中心に分割配置している。すなわち、東２階の「座敷６帖」と「次の間６帖」に導くコエンに置かれた箱階段と、東２階「使用人部屋」に上る梯子段。表２階の「座敷８帖」、「座敷６帖」に導くニワの小縁に置かれた箱階段。そして、表２階「座敷７帖」へと導くダイドコロの下手西側の側桁階段。裏２階「座敷４畳半」へと導くダイドコロ脇のミズヤに設けられた洋風階段である。表２階「座敷７帖」や裏２階座敷「4畳半」への階段からはそれぞれ新座敷２階にも伝える。

これら２階の座敷は後の改修造作普請が行われていた。すなわち、東２階の「座敷６帖」「次の間６帖」と表２階の「座敷８帖」は、栂造作が凝らされ、それを示す「本家二階図」（図⑯）が残されている。また、表２階の「座敷７帖」「座敷６帖」も栂造作が凝らされ、両座敷の厚い境壁は表２階階段室増築の際の改修工事を物語っている。さらに、裏２階の「座敷４畳半」の栂造作も、新座敷の増築に伴った普請に依っていた。

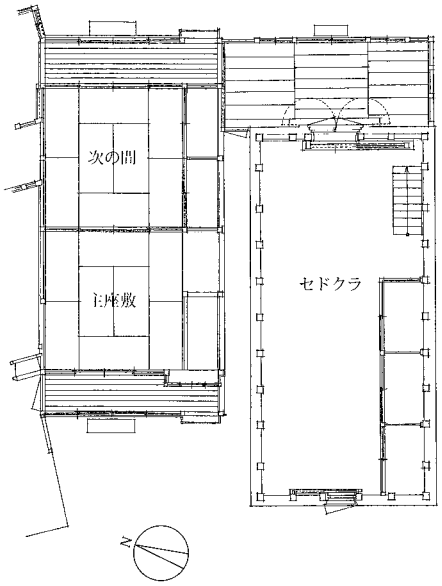
(2) 新座敷

構造形式　桁行 4.676m、梁間 7.516m、３階建、桟瓦葺。東西南北四方に屋根を付降ろす構成に、２階西側８帖座敷の上に望楼を載せる。望楼は桁行 3.750m、梁間 3,753m、寄棟造、桟瓦葺。西側を正面に、三方を船枻造に扇垂木軒を大きく出す。そして、その東側に階段室を下屋に出す。ダイドコロ下手は空地を挟んで、その奥ミズヤから増築新座敷棟に続き、その南側隣地に接してセドクラ (背戸蔵) を置く。

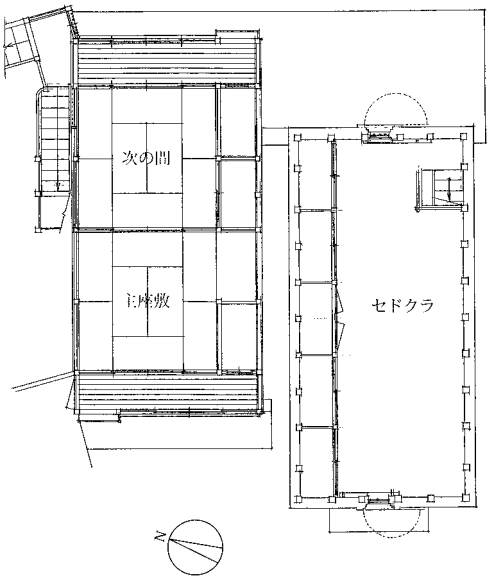
規　　模　平面積 45.38㎡（セドクラを除く）

増築新座敷棟は、瓦葺３階建て、栂普請。1・2層が客間座敷、それに海を望む表側に３層目望楼が載る。

ダイドコロ下手のミズヤには新座敷棟との間、擬宝珠をあしらった総欅造りの見事な洋風階段が設けられ、それから２階座敷、そして３層望楼へと導かれる。望楼は瓦葺き寄



新座敷及びセドクラ１階 平面図（1/200）



新座敷及びセドクラ２階 平面図（1/200）

棟造り、軒を扇垂木に三方船枻造りで、船主館に相応しい表構えに添える。

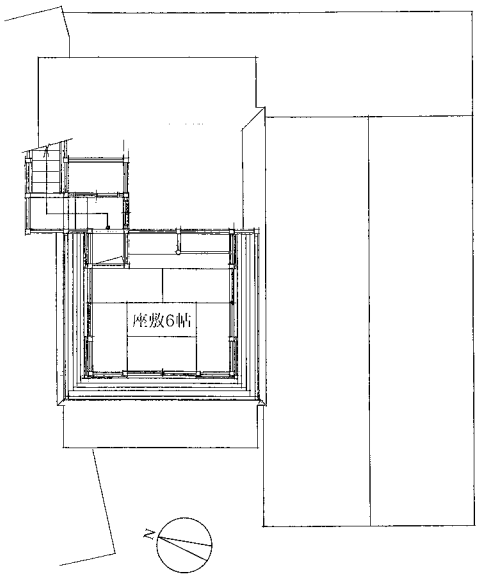
1階座敷は、表側（西側）に主座敷8畳、次の間8畳とし、それぞれ東西に縁側、そして庭を設ける。主座敷8畳は栂の角柱長押付き、聚楽土塗り。天井は杉杢板羽重ね張り竿縁天井。南側正面の右側に一間床を構え、縁側に向かって付書院を設ける数寄屋造の座敷である。床柱はもみじの角柱。それに真塗の床框と杉の落掛を取り合せる。床は薄縁敷。床脇は欅の地板、花梨（束はチーク）の違棚。付書院は欅の卓板で、三方に枠を廻して引違いの障子欄間としたやや重厚な造りである。次の間境の欄間には黒漆塗の枠に金泥で菊紋を配した桐板が嵌められている。

2階座敷は、表側に主座敷8畳、次の間8畳、その東西に縁側が付く。栂の角柱、長押を付けず。青竹色土壁塗り。天井は杉杢板羽重ね張り竿縁天井。2階座敷に相応しく軽快な数寄屋造に凝らされている。主座敷は、南側に各一間の床と床脇を設け、栂四方柾の床柱に真塗の床框、杉の落掛を取り合せる。右側縁に向かって壁とし、その中に平書院を開け、左側に地板を入れ違棚の一方を袋棚にした斬新な床構えをつくる。次の間境の欄間には、桐板に象牙の鶴が嵌められている。

望楼座敷は6畳敷。栂柱に鼠色の土壁塗。天井は杉杢板羽重ね張り竿縁天井。そして入口の戸襖脇、間口一間半床を海側に向け構える。三方に一間4枚摺りガラス障子引違いの肘掛窓を開け、勾欄付きの肘掛濡れ縁を廻らす。

床は、杉柾板の前板に一間半通しに白竹の落掛を渡し、その上を透かし、そして間中に杉磨き丸太の床柱を立て、紫檀の框床に杉の落掛を取り合わせる。狆潜りをやや高くあける。床は薄縁敷き。一方の床脇は欅板の蹴込み床とし、一位の板(中に楓の葉をあしらう)を矩折に、中を円く透かした違棚を入れ、無目に替えてシャレ木小丸太を渡し、その上部壁も透かす軽快で斬新な意匠が凝らされ、その開放感は海へ開く。

こうした洒落た意匠の望楼座敷には、離れ建物を象徴するように近代期の気風に満ちた開放的な寛いだ雰囲気が醸成されている。一方、農家型を基調としたダイドコロ廻りの豪壮な造りは、本座敷の意匠にも保守的な古調を留め、それらが相俟って近代黎明期の時代風潮の一面を窺わせる近代和風建築の姿を中村家住宅に見ることができるのである。

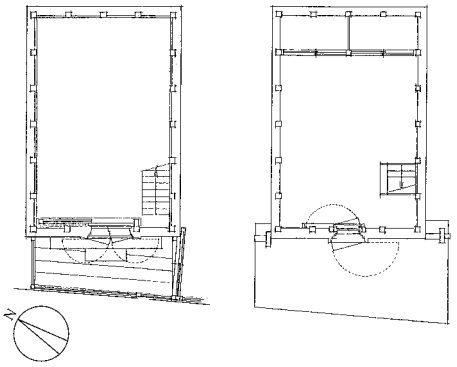


新座敷3階 平面図（1/200）

(3) 土　蔵

構造形式	新蔵	桁行 5.661m、梁間 3.631m、2 階建、妻入、桟瓦葺　蔵前付き
	セドクラ	桁行 9.433m、梁間 4.363m、2 階建、妻入、桟瓦葺　蔵前付き
	西蔵	桁行 7.474m、梁間 5.604m、2 階建、妻入、桟瓦葺　蔵前付き
	バンゲ蔵	桁行 3.315m、梁間 5.632m、2 階建、平入、桟瓦葺　蔵前付き
	前蔵	桁行 4.528m、梁間 7.496m、2 階建、平入、桟瓦葺　蔵前付き
	米蔵	桁行 5.460m、梁間 6.480m、2 階建、平入、桟瓦葺　蔵前付き
	塩物蔵・浜蔵	桁行 9.492m、梁間 4.087m、2 階建、平入、桟瓦葺　蔵前付き
規　　模	新蔵 20.55㎡／セドクラ 41.15㎡／西蔵 41.88㎡／バンゲ蔵 18.67㎡ 前蔵 33.94㎡／米蔵 35.38㎡／塩物蔵・浜蔵 38.65㎡	

新蔵　桁行 3 間、梁間 2 間の規模で、1・2 階とも間仕切りを設けず 1 室とする。基礎は野石布積みに縁石を敷いた布基礎。柱は欅の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。折置組に小屋梁（欅）を架け、束立てて牛梁（欅）を受け、この牛梁に登り梁を架けて屋根面を支持する。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽は漆喰塗り込めとし、垂木形を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、腰廻りをささら子下見板張りとする。内部は真壁、漆喰仕上げ。床は 1・2 階とも広幅の欅板張り（釘留め未確認）。大引は梁間方向に半間間隔で通る。箱階段を置く。入口には外から順に、両開きの土扉、片引きの土戸、板戸、腰高障子が入る。2 階窓は壁面に合わせて土扉とし、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。



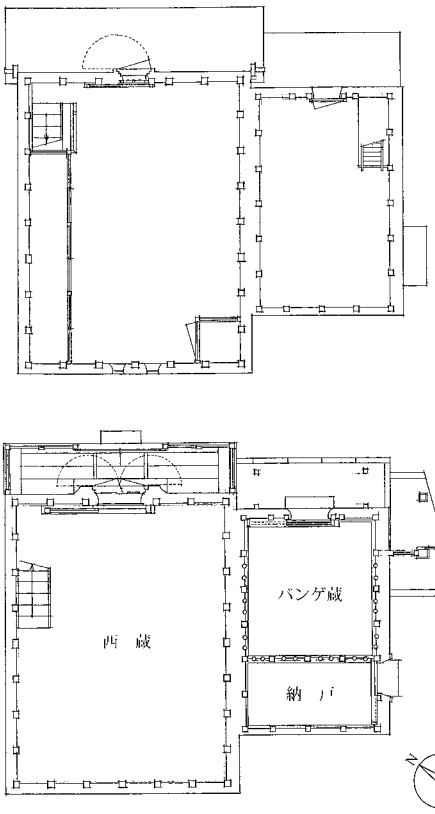
新蔵 1 階（左）・2 階（右）平面図（1/200）

セドクラ　桁行 5 間、梁間 2.5 間の規模で、1・2 階とも間仕切りを設けず 1 室とする。基礎は笏谷石の切石 1 段の布基礎。柱は欅の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。折置組に小屋梁（欅）を架け、束立てて牛梁（欅）を受ける。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽は漆喰塗り込めとし、垂木形を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、腰廻りを人造石塗洗出し仕上（南面のみ張付け石積み）とする。内部は真壁、漆喰仕上げ。床は 1・2 階とも大引に松板張り（釘留め未確認）。箱階段を置く。大引は梁間方向に半間間隔で通る。入口には外から順に、両開きの土扉、片引きの土戸、板戸、腰高障子が入る。背面 1 階窓は鉄扉、2 階窓は壁面に合わせて土扉とし、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。

西蔵　桁行 4 間、梁間 3 間の規模で、1・2 階とも間仕切りを設けず 1 室とする。基礎は地覆石に花崗岩の切石 1 段の布基礎。柱は欅の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。京呂組に小屋梁（欅）を架け、束立てて牛梁（欅）を受け、この牛梁に登り梁を架けて屋根面を支持する。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽は漆喰塗り込めとし、垂木形を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げ。南・西外壁とも全面ささら子下見板張りとする。内部は真壁 1・2 階とも欅板腰横羽目板張り、漆喰仕上げ。床は 1・2 階とも広幅の欅板張り（釘留め未確認）。2 階床の大引は梁間方向に半間間隔で通る。箱階段を置く。入口には外から順に、

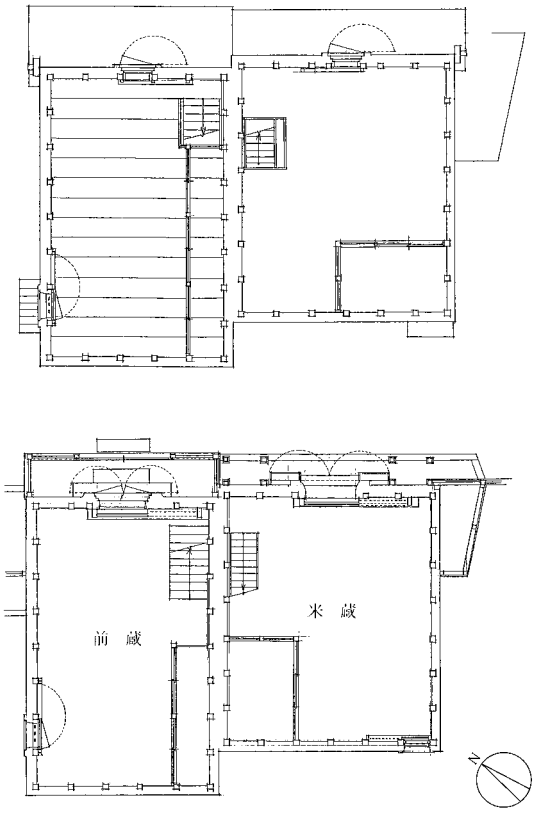
両開きの土扉、片引きの土戸、板戸、腰高障子が入る。正面窓には、外壁面に合わせて土扉を、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。背面中央にはガラス嵌め殺しの円窓を２窓開ける。

バンゲ蔵　桁行２間、梁間３間の規模で、平入り。1階に間仕切りを設け２室とする。後部を間口１間の納戸とし、妻入りに、入口には片引きの板戸が入る。2階は１室とする。基礎は地覆石に花崗岩と笏谷石を布石積みした布基礎。柱は桧の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。小屋組は両妻面を束立ての二重梁として、地棟となる牛梁を架ける。この牛梁に登り梁を架けて、登梁上に半間間隔で母屋を渡した化粧屋根裏とする。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽は漆喰塗り込めとし、鉢巻を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、南面は腰廻り、西面は全面縦羽目板張り（黒塗装）とする。内部は真壁、1階は柱間半間に３本の杉丸太（径３寸）を建てた土塗壁。納戸は柱間半間に竪羽目板張りとする。2階壁は漆喰仕上げ。床は土間仕上で、入口側土間半分をコンクリート土間にする。納戸は板張り床。2階床は杉板張り（釘留め未確認）。2階への梯子階段を置く。2階床の大引は桁行方向に半間間隔で通る。バンゲ蔵・納戸入口には片引きの板戸が入る。2階正面窓には鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。



西蔵及びバンゲ蔵
1階（下）・2階（上）平面図（1/200）

前蔵　桁行2.5間、梁間４間の規模で、1・2階とも間仕切りを設けず１室とする。基礎は地覆石に花崗岩を２段布石積みとした布基礎。柱は欅の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。小屋組は京呂組に小屋梁（欅）を架け、束立てして牛梁（欅）を受け、この牛梁に登り梁を架けて屋根面を支持する。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽を漆喰塗り込め、鉢巻を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、北面のみ腰廻りを平貼りのなまこ壁、そして、浜風の強い西面・南面の外壁全面をささら子下見板張り（黒塗装）とする。内部は真壁、漆喰仕上げ、2階のみ欅板腰横羽目板張り。床は1・2階とも広幅の欅板張り（釘留め未確認）。箱階段を置く。2階床は、梁間中央に床梁を掛け、梁間方向に大引を半間間隔で通す。入口には外から順に、両開きの土扉、片引きの土戸、板戸、腰高障子が入る。2階正面窓には、外壁面に合わせて土



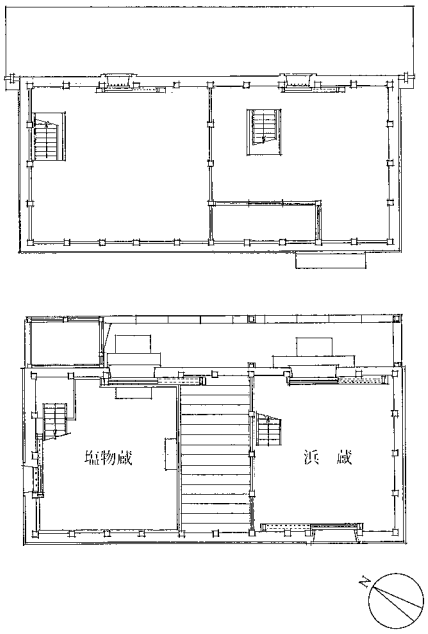
前蔵及び米蔵１階（下）・２階（上）平面図（1/200）

扉を、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。また、1・2階北面窓には鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。1階窓上部には霧除け庇、2階窓上部には唐破風を模した霧除け庇を付ける。

米蔵　桁行3間、梁間3.5間の規模で、1・2階とも間仕切りを設けず1室とする。基礎は地覆石に花崗岩を2段布積みとした布基礎。柱は欅の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。小屋組は京呂組に小屋梁（欅）を架け、束立てして牛梁（欅）を受け、この牛梁に登り梁を架けて屋根面を支持する。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽を漆喰塗り込め、鉢巻を見せる。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、浜風の強い西面・南面の外壁全面を縦羽目板張り（黒塗装）とする。内部は真壁、漆喰仕上げ、2階のみ欅板腰横羽目板張り。床は1・2階とも広幅の欅板張り（釘留め未確認）。箱階段を置く。2階床は、梁間中央に床梁を掛け、梁間方向に大引を半間間隔で通す。入口には外から順に、両開きの土扉、片引きの土戸、板戸、腰高障子が入る。2階正面窓には、外壁面に合わせて土扉を、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。また、1・2階北面窓にも鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて土扉を入れる。

塩物蔵・浜蔵　桁行5間、梁間2間の規模で、東側に梁間およそ1,200㎜の下屋を出す。蔵前の土間とし、その北側1間を物入とする。土蔵1階は塩物蔵桁行3間に間仕切りを設け、塩物蔵と浜蔵とを分け、2階も塩物蔵桁行2.5間で間仕切り、分けて1・2階ともそれぞれ2室とする。基礎は花崗岩の切石1段の布基礎をまわす。柱は桧の角材、側廻り通柱に半間間隔に配する。浜蔵の小屋組は、両妻梁に束立てして牛梁を架ける。この牛梁に登り梁を架け、その上に半間間隔で母屋を渡した化粧屋根裏とする。一方、塩物蔵の小屋組は、妻梁に牛梁（欅）を架け、この牛梁に登り梁を架けて屋根面を支持する。異なる二つの小屋組みを合わせて1棟につくる。屋根は桟瓦葺、軒裏及び螻羽を漆喰塗り込め仕上とする。外壁は土壁の大壁、漆喰仕上げとし、三方外腰壁をささら子下見板張り（黒塗装）とし、蔵前の腰は目板張りとする。

浜蔵の内部は、真壁、漆喰仕上げ、1・2階腰板を入れる。床は1・2階とも桧板張り（釘留め未確認）。側桁階段を置く。2階床の大引は梁間方向に半間間隔で通る。正面入口には外から順に、片開きの土戸、片引きの腰高障子が入る。また、西側にも片引き板戸の開口部を開ける。そして2階正面窓には、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて片引き板戸を入れる。一方、塩物蔵の内部は、真壁、漆喰仕上げ、1階腰は横羽目板張りとし、2階は腰板張りとする。1階床は土間叩き仕上げ、奥1間を上り框に桧板床張りとする。そして土間の北東隅には半畳の床縁を設けて、側桁階段を置く。2階床は桧板張り（釘留め未確認）。2階床の大引は梁間方向に半間間隔で通る。塩物蔵の入口には、外から順に、片開きの土戸、片引きの腰高障子が入る。塩物蔵の1階北窓、2階正面窓には、壁心付近に鉄格子（金網）をいれ、内部に窓枠を取り付けて片引き板戸を入れる。

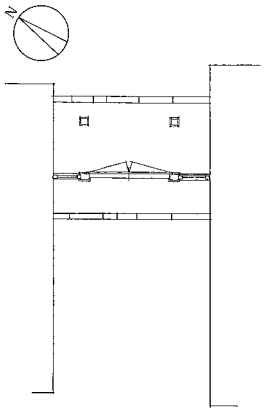


塩物蔵及び浜蔵
1階（下）・2階（上）平面図（1/200）

(4) 正門・中門・塀

構造形式　正門　　1 間 1 戸薬医門、切妻造、桟瓦葺、反り屋根
　　中門　　1 間 1 戸腕木門、切妻造、桟瓦葺
　　塀　　屋根塀、総長 20.26 m、桟瓦葺、主屋の北、南に取り付く。

正門　旧村道を跨いで主屋の式台に通じる切妻造の薬医門で、本来は貴賓を迎えるために設けた門で、「天保 9 年 (1838)　一番御宿□　河野浦　中村三之丞」（浜野家文書）にすでに門の存在が記され、その伝統を受ける「本家普請」の家屋敷の構想がもたらしたと考えられる。近世期の巡見使は船に依ったものかもしれないが、海に深くかかわった民の海への畏敬の念がそうした門構えを求めたとも考えられる。また現在も日常的に使用する門でなく、門扉を閉ざしている。正門の規模は、桁行すなわち本柱の柱間が 2,363㎜の規模で、本柱には 231 × 172㎜の欅材を用いる。門扉は両開きの欅の鏡板戸で、本柱の背面には控柱を立てて、上下 2 段の貫でつなぐ。床には近代の洋風建築を象徴する赤レンガが張られている。軸部は本柱上を冠木で繋いで固め、男梁を控柱と冠木の上にかけ出し、両端に欠きつけた軒桁と男梁の上に束立てて架けた棟木に 1 軒垂木を架けて屋根を支える。垂木は半繁垂木で直材を用いるが、破風には反りを付ける。



正門 平面図（1/200）

中門　主屋正面の基壇に設けられた新座敷前庭の門で、門前に御影石の石段が置かれている。かつては、中門に伝う主屋基壇に上がる石段が旧村道に置かれていた（写①参照）。中門の規模は、桁行すなわち柱間が 1,200㎜の規模で、本柱は 126㎜欅角材を用い、銅板根巻を施す。本柱に両方立を添えて、開ける門扉は欅鏡片折戸で、本柱と丁番で接続する。軸部は門柱の頂上に棟木をかけ、両柱の前後に腕木を貫いて、これに出桁を架け、屋根を支える。垂木は半繁垂木で直材を用いるが、破風には僅かにむくりを付ける。その破風には波に亀をあしらった見事な彫り物を施した懸魚が付く。

塀　塀は、南北に貫く旧村道に沿って、主屋前庭を囲う北塀と主屋南側の新座敷の前庭を囲う南塀が廻ぐる。

北塀は、式台の袖塀（幅 1.41m）より長さ 8.26 m、新蔵の蔵前に取り付く。軸部は切石積みの基礎の上に土台を通して柱を建て、柱の背面に控柱を直に取り付ける。柱は 100㎜角で、1 間 1,300㎜を標準に柱を配る。柱上には笠木を通し壁窓をあける。柱から正背に腕木を出して軒桁を受け、瓦葺屋根を支える。壁は漆喰塗りで仕上げ、表側腰壁を竪羽目板張りとし、内側は腰板張りとする。式台の袖塀には筬欄間に潜り戸を開く。

南塀は、中門より長さ 12 m隣地境に矩折りに廻ぐる。軸部は切石積みの基礎の上に土台を通して柱を立て、柱の背面に控柱を直に取り付け、貫を上下に通す。柱は 110㎜角で、1 間 1,200㎜を標準に柱を配る。柱上には笠木を通し、腰長押を廻らし、黒漆喰塗り小壁に刳り抜きを施す。そして柱から正背に腕木を出して軒桁を受け、瓦葺屋根を支える。腰壁は表側を縦羽目板張りとし、内側は漆喰塗り仕上げ、腰板張りとする。

塀の建築年代は、建築的特徴や風触の具合から、主屋座敷棟（明治期）、新座敷棟（大正期）と一連の建築に考えることができる。

Ⅶ　中村家住宅の変遷

中村家の所蔵史料については包括的な史料調査が実施されている。現段階で、中村家住宅の変遷に関係する史料として抽出できたものは、表３に示した通りである。

近世期の上使宿普請　中村家文書のうち、建物の由緒をもっとも端的に示すものが、中村家が務めた上使宿の記録に付随する以下の家屋敷指図である。幕府から藩の視察に来た使者を宿泊させた宿、すなわち上使宿は、農民身分でもその利用者の身分格から武士のような門塀を廻らし、主屋をその奥に建てるという屋敷構えが許されていた。

「天明７年 (1787) □状　三番　河野浦三郎右衛門家」（図①）

「寛政元年 (1789) 四月二日　御殿様ニ付家絵図御本陣御下宿」（図②）

「（本陣等間取図）」（西野家文書／図③）

「一番□御宿　河野浦　中村三郎右衛門」（浜野家文書／天保９年 (1838) ／図④）

現在と変わらない背後に山地を負った東西に狭小な敷地環境とその形状が、入口に対し奥に三段の部屋構成に、右側に土間、左側に式台を備えた座敷群が取られた基本構成が定められてきた。それに加えて、上使宿に相応しい設えのもとに「湯殿」を備え、「御庭」をもつ座敷群の発達がもたらされた。そして、廻船業の一大発展期を迎える天保期の「一番□御宿」屋敷指図（図④）では、上使宿として「上座敷」を中心とした座敷の発達が複雑な平面をつくる。さらに、海に向かって式台前に門も開く。ここでは、これまでの大きな「土間」がおよそ半分に縮小し、それが「板の間」に変わり、農業主体の従前の家業から廻船業へと大きな変化を遂げた時期とも推定される。ほかに、近世期の普請に関わる安政４年 (1857) の「普請帳」（帳①）では、「石や」「かべや」を含む多く人（隣村赤萩村の人たちの名も記されている）の出づらや「ふしん見毎い」などが記されているが、その建物の特定は難しい。

帳①「普請帳」（安政４年）

明治期の「本家新築」　明治期の主屋造営は、「本家新築見舞控帳」（明治 20 年３月中旬／帳⑥）及び「本家工数勘定記　丹生郡別所村 田中長八」（明治 20 年 12 月吉日／帳㉓）から、主屋は明治 20 年 (1887) の新築で、棟梁は田中長八であることが分かる。そして、「本家」と一体となったセドクラの平面構成（図⑦・図⑧）から、セドクラは主屋と同時期造営とみることができよう。また、「北土蔵新築諸費記」（明治 24 年／帳⑦／「北土蔵」を中村家では「新蔵」と称す）から、新蔵は主屋に続き明治 24 年 (1891) に造営されたことが分かる。そして、それら屋敷指図が以下のものと推定できる。

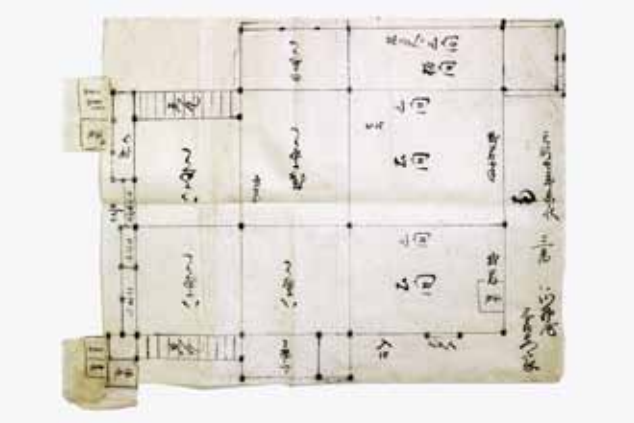
「家表側建絵図 五十分壱之割」（明治 19 年２月／図⑦）

「五十分壱之地絵図」（明治 19 年２月／図⑧）

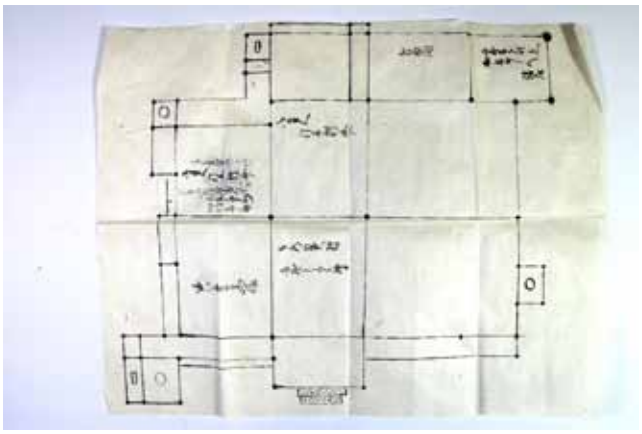
「五拾分一之図（座敷之上之廻り図・本屋之上野廻り図）」（明治 19 年／図⑨）

「五十分一之建図」（明治 19 年２月／図⑪）

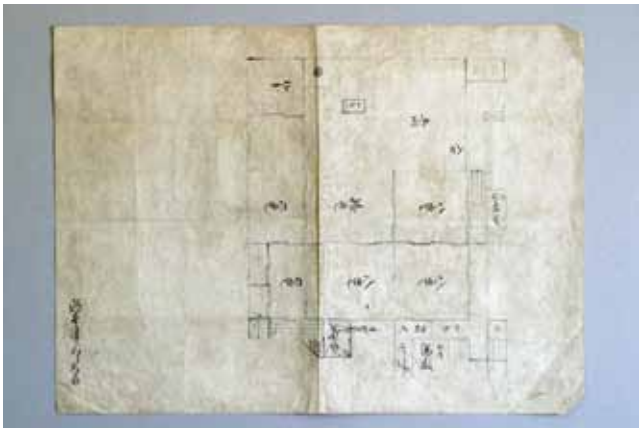
これら屋敷指図の中の「地絵図」と現況建物平面図とは、主座敷床と付書院の位置、「休



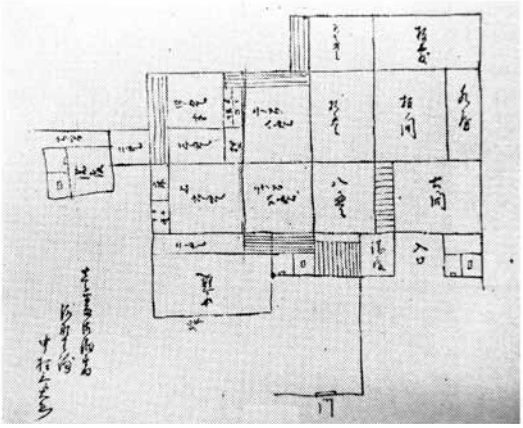
図①「河野浦三良右衛門家」（天明 7 年）



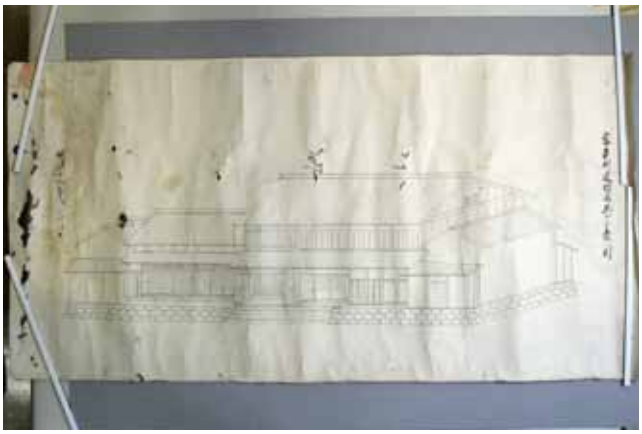
図②「御殿様二付家絵図御本陣御下宿」（寛政元年）



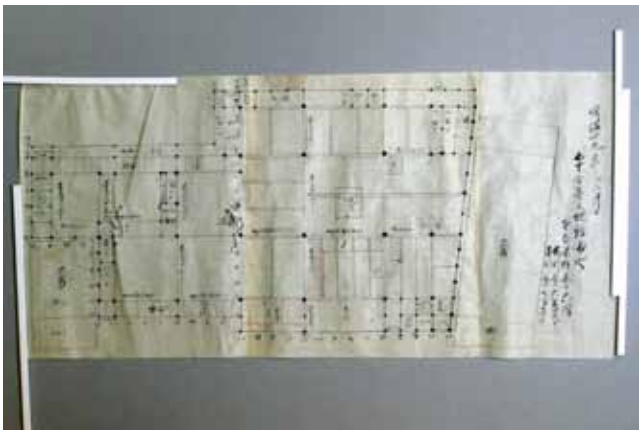
図③「（本陣等間取図）」(年代不詳／西野家文書）



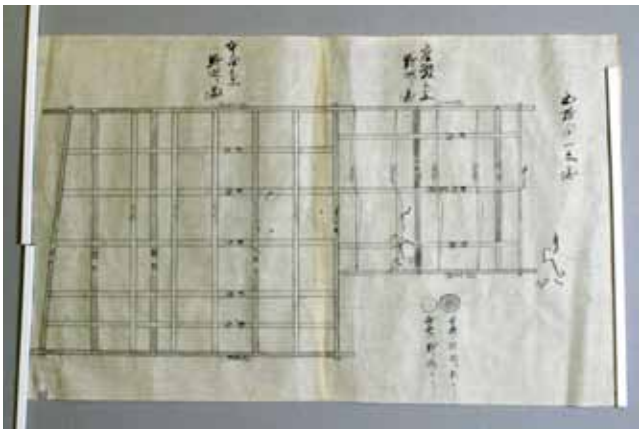
図④「（御宿間取図）」(天保 9 年／浜野家文書)



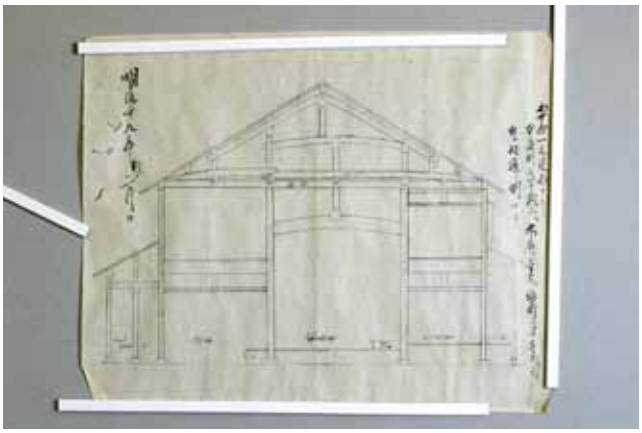
図⑦「家表側建絵図 五十分壱之割」（明治 19 年）



図⑧「五十分壱之地絵図」（明治 19 年）



図⑨「五拾分一之図」（明治 19 年）



図⑪「五十分一之建図」（明治 19 年）

足の間」部分とが異なるが、「(座敷廻り平面図)」(図⑭)の存在から、主座敷脇の中廊下を北に通し四畳半の「休足の間」にし、主座敷の床と付書院も中廊下側に改めたと見ることができる。

そして、主屋の「家仕様帳」「座敷木積り記」「休足間木積」など、構造材等の木拾いを記した「本宅木割記」(帳③)や「座敷木割帳」(帳②)、「臺所廻り木割分也」と記した「木割帳」(帳⑤)、「木割簿」(帳④)は、明治20年の「本家新築」に関するものと考えることができる。そして、「座敷木割帳」(帳②)では、後の新座敷の普請の際の棟梁である「吉田吉之助」の名前が所見できる。

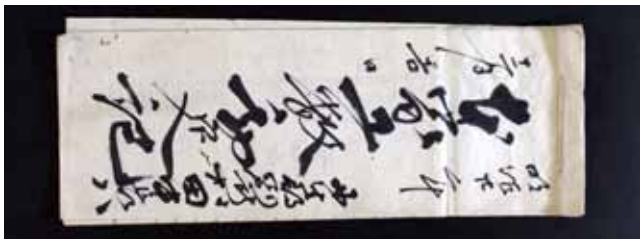
「北土蔵新築諸費記」(明治24年/帳⑦)では、早いもので明治21年よりの記載が管見され、「大工之部」には、明治23年12月より同24年12月までの記載とともに、主屋の棟梁と伝えられる「田中長八」の名前も所見できる。

一方、「□□絵図面之事」(明治12年10月/図⑤)からは、明治期の主屋造営が明治12年(1879)から計画されていたことが分かる。当図では主座敷が東側に置かれ、その北に床付き「三畳半」と「四畳半」、そして、「仏間」が西側に設けられて、明治19年指図と座敷廻りが大きく異なり、主座敷と仏間の取り方を重点に間取りの検討が重ねられていたことを窺わせる。併せて村道を挟んだ西側には、式台前の正門やその両脇に、背後の敷地境界(のちに、さらに海側へと新開地が開く)に沿って土蔵群も計画されていた。

そして、「(平面図及び小屋組断面図)」(図⑫)と「(主屋平面図)」(図⑥)においても、主座敷と次の間の間取りが同じことから、「□□絵図面之事」(図⑤)と同計画期の屋敷指図と見ることができる。これでは、西側の仏間に替わって「隠居間」が設けられ、仏間は南側に、東側主座敷の北側に「休足の間」が検討されていたことも分かる。そして、「(主屋北面及び西面立面図)」(図⑱)及び「(主屋北面立面図)」(図⑰)は、「家表側建絵図五十分壱之割」(明治19年/図⑦)の作成に要し、また座敷の北側、「北土蔵(新蔵)新築」の屋根構成の検討に用いた立面図とも見ることができるため、「(平面図及び小屋組断面図)」(図⑫)も明治20年の「本家新築」に関する一連のものと見ることができる。

帳⑥「本家新築見舞控帳」(明治20年)

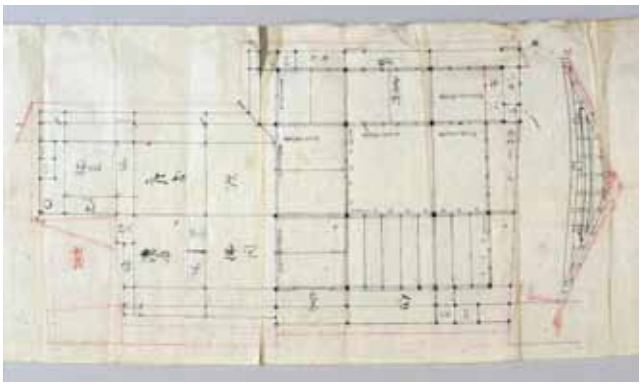
「門前石垣入用記」(明治36年/帳⑧)は、表構えの石垣の調達で、「合計 二百□拾二円


帳㉓「本家工数勘定記」(明治20年)

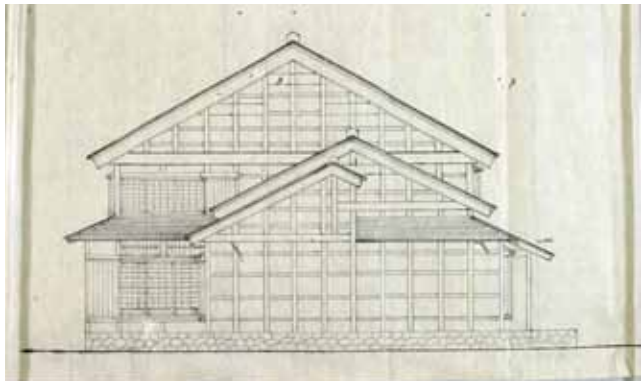
帳②「座敷木割帳」

帳③「本宅木割記」

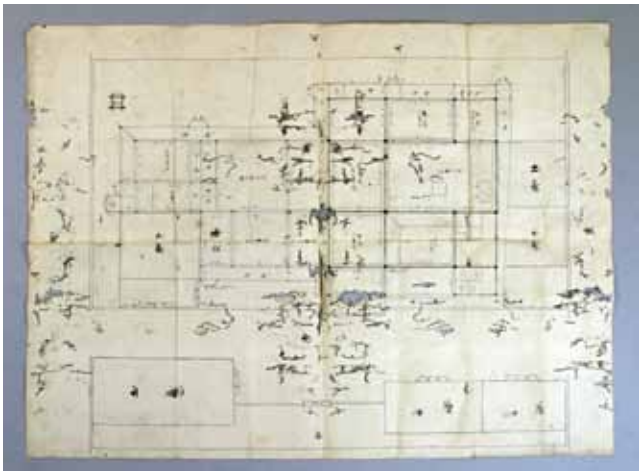
帳⑦「北土蔵新築諸費記」(明治24年)



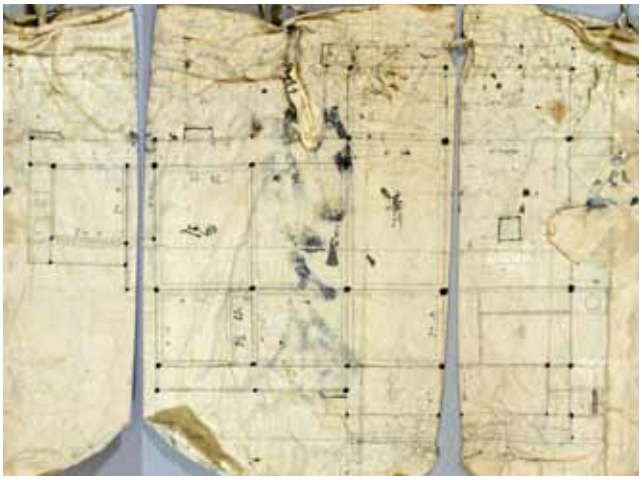
図⑫「（平面図及び小屋組断面図）」



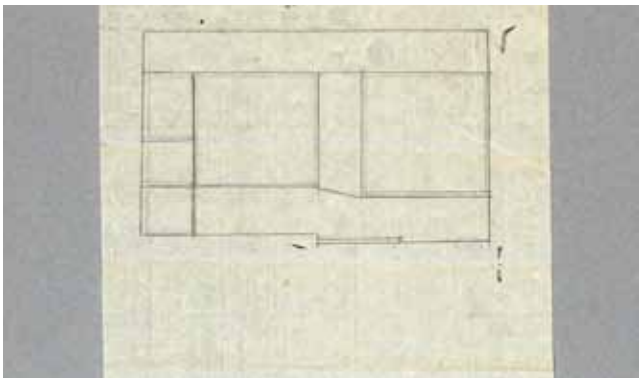
図⑰「（主屋北面立面図）」



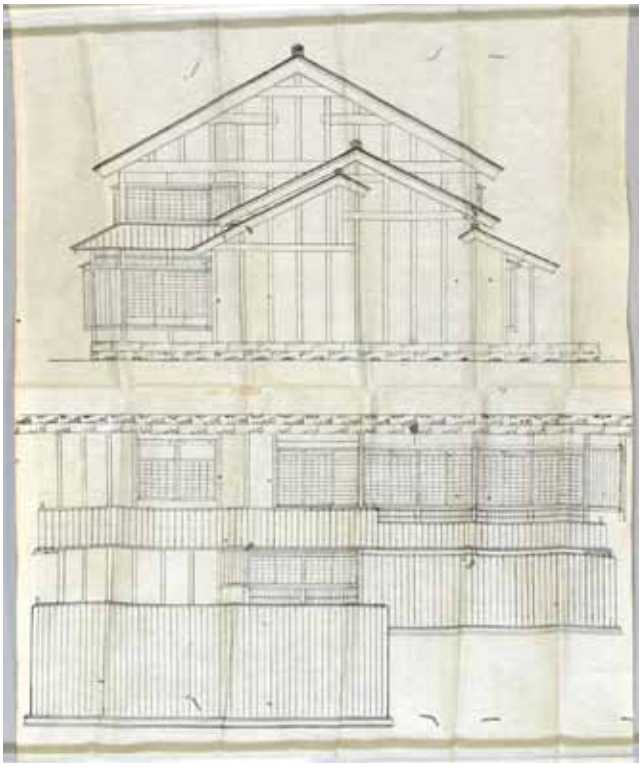
図⑤「□□絵図面之事」（明治 12 年）



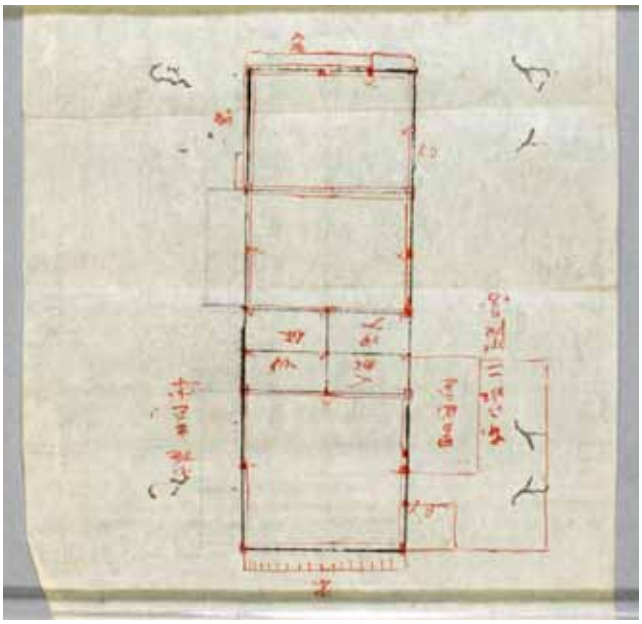
図⑥「（主屋平面図）」（画像合成加工）



図⑭「（座敷廻り平面図）」



図⑱「（主屋北面及び西面立面図）」



図⑯「本家二階図」

七十一銭」というかなり大きな石工事が行われている。この「門前」は、既に明治 12 年の「□□絵図面之事」（図⑤）計画俎上の「門」を意味するが、本史料から明治 36 年 (1903) にはその門（正門）は成っていたと推定できる。

併せて、明治 22 年 (1889) の河野村発足に伴い初代村長を務めた中村亀三郎 (1852-1935) の子息、俊蔵の婚儀に伴い、明治 43 年 (1910)6 月、前蔵裏手で撮影された記念写真など（写①・②）から、正門と土蔵群の造営が明治 43 年以前であることも認められる。そして、その写真から見受けられる建物の経年風蝕は、明治 24 年の「北土蔵新築」とあまり遠くない時期の造営を思わせる。また、海岸に迫る塩物蔵・浜蔵の造営は、新開地として福井県から譲渡を受ける明治 29 年 (1896) を待たねばならず、その造営年代は明らかではない。

大正期の新座敷増築　新座敷の造営は、「新谷屋敷瀬戸石垣受負証」（大正元年 (1912)8 月 24 日／帳⑮）から、南側「瀬戸」蔵（セドクラ）の南側、新谷屋敷（新屋弥右衛門家）を譲り受け、その東側の石垣工事着手から起ったことが分かる。そして、以下の普請文書、

「新座敷大工賃記」（大正 2 年 4 月 4 日／帳⑯）
「新築職人工料記」（大正 2 年 4 月 5 日／帳㉑）
「南座敷新築見舞控」（大正 2 年 5 月／帳⑰）
「造作差図書」（大正 2 年 10 月 2 日／帳⑱）

などから、新座敷は大正 2 年 (1913) 造営と推定できる。

「新築職人工料記」（帳㉑）では、「大工ノ部」「瓦屋ノ部」「石工ノ部」「新座敷地業」「表具師」「畳屋」「木挽ノ部」「桶屋ノ部」「壁屋ノ部」「雑人足ノ部」「女人足ノ部」と、それぞれの職人工が記されている。これらから、以下のことが分かる。

① 新座敷地業は、大正 2 年 5 月 9 日から 6 月 27 日に亘っている。
② 大工工事は、大正 2 年 4 月より翌大正 3 年 2 月 23 日の 11 カ月に及んでいる。
③ 棟梁は敦賀の吉田吉之助で、月毎の出づらから「大阪　藤原又一」「大阪　井之上福松」「大阪　樋口藤三郎」を中心とした大阪、敦賀の多くの大工が加わっての普請である。
④ 大工方を除いては、石工に「三国石工　池田金吉」「阿曽　石山孫右衛門」や木挽の「赤萩　宮下栄治郎」など、地元、近隣の職人衆に依った工事が行われた。

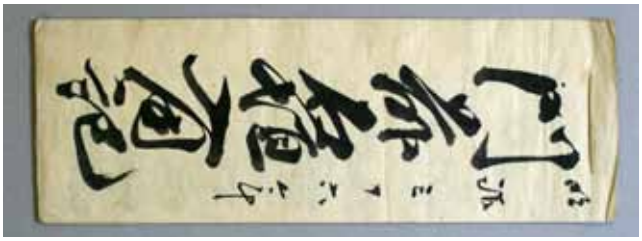
なお、「新座敷大工賃記」（大正 2 年／帳⑯）は、4 月から 7 月に亘る 4 ヶ月間の大工職人の工科記で、「新築職人工料記」（大正 2 年／帳㉑）の「大工ノ部」の一部を記したものと分かる。

そして「建具手間明細書」（帳⑲）では、「三階之部（望楼の建具）」「二階之部」「階下之部」「上便所之部」「表通便所」「棚之部」「風呂場之部」「表二階之部」などの建具が挙げられていることから、大正 2 年普請に関わる明細書であることが分かり、これによって新座敷の造作とともに、上便所・表通便所・風呂場・表二階階も改装されたことが分かる。この「表二階之部」は、新座敷普請との繋がりから表 2 階の「座敷 8 帖」と「座敷 6 帖」の改修普請と見ることができる。

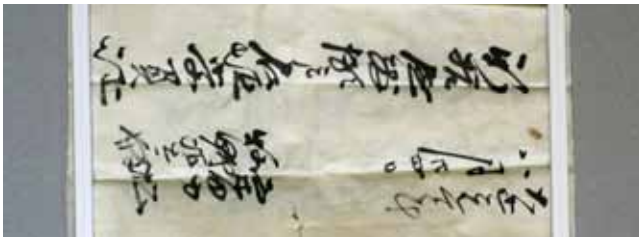
「本家二階図」（図⑯）は、主屋建物の中に表 2 階の「座敷 8 帖」と東 2 階の「座敷 6 帖」「次の間 6 帖」を設ける栂普請の改修造作のことで、内装の栂付柱が施された改造痕跡は指図と一致しているが、その工事年代は不詳である。

写①　玄関前での嫁入り写真（上段：明治 43 年／下段：平成 26 年）

写②　前蔵裏手での記念写真（上段：明治 43 年／下段：平成 26 年）



帳⑧「門前石垣入用記」（明治 36 年）

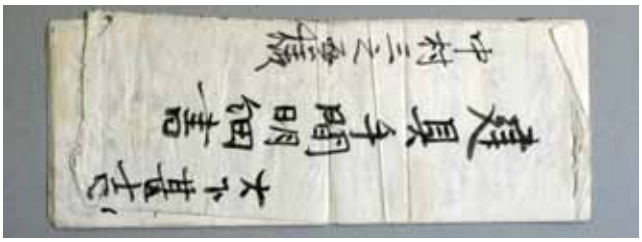


帳⑮「新谷屋敷瀬戸石垣受負証」（大正元年）

帳⑯「新座敷大工賃記」（大正 2 年）

帳⑰「南座敷新築見舞控」（大正 2 年）

帳⑱「造作差図書」（大正 2 年）



帳⑲「建具手間明細書」

また、これら大正 2 年の普請準備が明治 44 年頃に始まっていたことを以下の文書は示している。

「栂木渡し約定書」（明治 44 年 (1911)12 月 5 日／帳⑨）

「栂材木約定仕候写」（明治 44 年 12 月 5 日／帳⑩）

「大阪買入栂松買入書」（帳⑪）

「受取證」（明治 45 年 4 月 1 日／帳⑫）

「建築用材記」（明治 45 年 4 月 27 日／帳⑭）

これらから、新座敷の造営には大量の栂材が大阪で買い付けられ、持ち船「歓晃丸」を使った河野への運搬も行われ、栂普請が行われたことも分かるのである。

こうした中村家普請に関わる文書は、明らかでない棟札や墨書等に代わって中村家住宅の普請を証左する貴重なものである。すなわち、中村家住宅の歩みは、次の三期の時代普請を得て来たことが窺える。

① 近世期の上使宿普請（巡見使宿の記録に付属する屋敷指図）

② 明治 20 年の「本家新築」とそれに続く「北土蔵新築」

③ 大正 2 年の新座敷増築と主屋の一部改修普請

そして、以上のことから現存する中村家住宅は、明治 20 年の「本家新築」普請に依るものであると判断できよう。その普請は、普請文書が示すように、先祖に伝わる上使宿として地域の名主たる誇りを継ぐ新築普請であったことが窺える。すなわち、近世期の格式ある主屋建物（上使宿）の構えを継承した新築普請と見ることができる。通りに対し奥行き方向三段の部屋構成を取り、左側に座敷、右側に土間（板間）とした近世期（巡見使宿時代）の主屋普請の特徴を継承し、御成り座敷として一層の発達を遂げた造りをもたらした。そして、以後の普請には、中村家の繁栄を背に計画的な増改築が加えられ、現況の中村家住宅の家屋敷構えを造り出してきたと考えられる。

一方、土蔵については、新蔵の建築に係る「北土蔵新築諸費記」（明治 24 年／帳⑦）のほかに建築年代に直接関係する史料が見つからず判然としないところを残すが、中村家住宅の家屋敷構えにおける不可欠な構成要素としてその究明は重要で、中村家文書調査の進行とともに今後の調査成果を待ちたい。

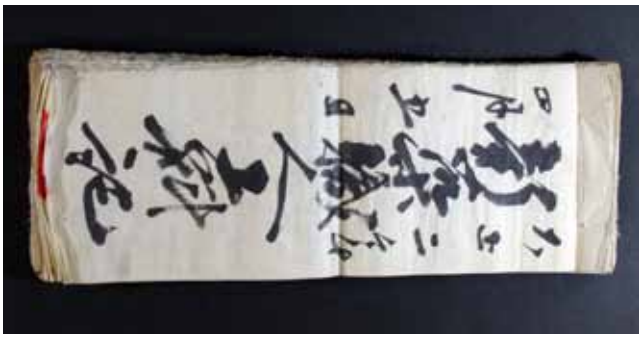
帳⑨「栂木渡し約定書」（明治 44 年）

帳⑩「栂材木約定仕候写」（明治 44 年）

帳⑪「大阪買入栂松買入書」

帳⑫「受取證」（明治 45 年）

帳⑭「建築用材記」（明治 45 年）



帳㉑「新築職人工料記」（大正 2 年）

帳㉒「大正二年職人控」（大正 2 年）

表 3-1　中村家住宅　普請関係絵図面

No.	表　題	日　付	西　暦	形態	点数	備　考
図①　河野浦三良右衛門家		天明7年	1787年	状	1	第10回巡見使（三番御宿）
図②　御殿様ニ付家絵図御本陣御下宿		寛政元年4月2日	1789年	状	1	第10回巡見使（三番御宿／堀八郎右ヱ門）
図③　（本陣等間取図）				状	1	第10回巡見使（三番御宿）
図④　（御宿間取図）		天保9年	1838年	状	1	第11回巡見使（一番御宿）
図⑤　□□絵図面之事		明治12年10月	1879年	状	1	主屋・内蔵3・外蔵3・門、方位誤記
図⑥　（主屋平面図）				袋	1	
図⑦　家表側建絵図五十分壱之割		明治19年2月	1886年	状	1	外観図（主屋・内蔵2）
図⑧　五十分壱之地絵図		明治19年2月	1886年	状	1	平面図（主屋・内蔵2）
図⑨　五拾分一之図		明治19年2月？	1886年	状	1	「座敷之上野廻り図・本家之上野廻り図」
図⑩　（主屋平面図）		明治19年2月？	1886年	状	1	
図⑪　五十分一之建図		明治19年2月	1886年	状	1	断面図
図⑫　（平面図及び小屋組断面図）				状	1	屋根伏せ朱書き
図⑬　（主屋平面図）				状	1	屋根伏せ朱書き
図⑭　（座敷廻り平面図）（部分）				状	1	現状に近い設計
図⑮　（座敷廻り平面図）（部分）				状	1	
図⑯　本家二階図				状	1	平面図（表側1部屋・奥側2部屋）
図⑰　（主屋北面立面図）				状	1	
図⑱　（主屋北面及び西面立面図）				状	1	

表３-2　中村家住宅　普請関係文書

No.	表　題	日　付	西　暦	形態	点数	備　考
帳①	普請帳	安政4年2月	1857年	冊	1	職人出役、普請見舞
帳②	座敷木割帳			冊	1	差出：吉田吉之助　「座敷木割」
帳③	本宅木割記			冊	1	家仕様帳・座敷木積り記・休足間木積
帳④	木割簿			冊	1	
帳⑤	木割帳			冊	1	「台所廻り木割分也」
帳⑥	本家新築見舞控帳	明治20年3月中旬	1887年	冊	1	
帳⑦	北土蔵新築諸費記	明治24年	1891年	冊	1	木材・金物・石・瓦・大工・壁・左官・人足
帳⑧	門前石垣入用記	明治36年	1903年	冊	1	
帳⑨	栂木渡し約定書	明治44年12月5日	1911年	冊	1	差出：比石彦太郎（水畑商店） 「見積書」
帳⑩	栂材木約定仕候写	明治44年12月5日	1911年	冊	1	差出：水畑商店
帳⑪	大阪買入栂松買入書			封筒	1	封筒
帳⑫	受取證	4月1日		状	1	差出：歓昇丸　岩崎㊞ 宛名：比石彦太郎
帳⑬	受取證			状	1	差出：千羽丸㊞ 宛名：比石造船所
帳⑭	建築用材記	明治45年4月27日	1912年	冊	1	差出：比石彦太郎㊞ 宛名：中村御旦那様
帳⑮	新谷屋敷瀬戸石垣受負証	大正元年8月24日	1912年	冊	1	差出：牧野治太郎、栗田力松 宛名：中村三之丞様 坪敷36坪、高さ4間、幅9間
帳⑯	新座敷大工賃記	大正2年4月4日	1913年	冊	1	藤原又一(大阪)ほか大阪・敦賀・武生・大良
帳⑰	南座敷新築見舞控	大正2年5月	1913年	冊	1	
帳⑱	造作差図書	大正2年10月2日	1913年	冊	1	障子・押入・雨戸
帳⑲	建具手間明細書			冊	1	差出：木下甚吉 宛名：中村三之丞様 三階・二階・階下・便所・棚・風呂場・表二階
帳㉑	新築職人工料記	大正2年4月5日	1913年	冊	1	大工･瓦･石工･地業･表具･畳･木挽･桶屋･壁屋･人足
帳㉒	大正二年職人控	大正2年	1913年	冊	1	大正2年4月～3年3月
帳㉓	本家工数勘定記	明治20年12月吉日	1887年	冊	1	差出：丹生郡別所村 田中長八 明治19年2月～20年11月

表３-3　中村家住宅　普請関係古写真

No.	表　題	日　付	形態	点数	備　考
写①	（嫁入り写真）	明治43年6月 (1910)	枚	1	撮　影：主屋玄関前（南から）／越前武生町・勝写真館 新　婦：加賀の北前船主 米谷半平の娘 豊子 入籍日：明治43年6月12日
写②	（婚礼記念写真）	明治43年6月 (1910)	枚	1	撮　影：前蔵裏手（西から） 中村家：三之丞（亀三郎）・妻・子（俊蔵／新郎）

Ⅷ　主屋座敷の意匠特性

明治期の中村家の「本家新築」は、上使宿としての歴史をもつ近世期における家作伝統の踏襲を意図したものとみられ、それが接客空間である「本座敷」を優位に配置する。農家では、家の最も格式高い部屋は「仏間」であり、床の間・書院がつけられ、報恩講などの様々な行事を行う儀礼的空間として、仏壇と床の間は家の奥に、家の中心のオイを向いてとられるのが通例であるが、ここでは「本座敷」に対し従位に、田の字型に配置され、接客空間である「本座敷」「休足の間」などに主屋座敷の意匠特性を捉えることができる。

すなわち、主室 8 帖、次の間 8 帖からなる「本座敷」は、西側に縁側、南側は「中の間」に接し、「次の間」の東側を「仏間」とした鍵座敷の形態をとる。そして「本座敷」東側を中廊下とし、「休足の間」に続く。

「本座敷」の床は、正面間口 2 間の右側に配置し、東側中廊下に向かって付書院を設け、前庭縁側のある左側を床脇とし、縁側に向かって付書院、床とする通例の床構えとあえて異にしているのである。

明治 20 年 (1887) の主屋普請の家屋敷図である「五十分壱之地絵図」（明治 19 年／図⑧）では、「本座敷」正面に対し縁側のある左側を床とし、右に違棚とする通例の床構えとしている。これに対し、「座敷廻り平面図」（図⑭・図⑮）ではこの床構えを大きく変え、中廊下に向かって付書院を設けた現状の「本座敷」床構えに改変した。そのために付書院が置かれた中廊下には天窓が開けられている。

この改変による現状の「本座敷」床構えが「本家新築」普請と考えると、「本座敷」を上使宿の御成り座敷と捉えることに依って、「休足の間」からの御成りに対応した「本座敷」の東側（「休足の間」側）を上座と考えれば、通例と異にした床構えも背首できるのである。それはまた、「次の間」に続く取次の間で、土佐唐紙が好趣を添える「中の間」、それに備えられた表通り（旧村道）の式台など、武家の礼法に倣った玄関構えとともに、主座敷に特徴的な意匠をもたらすのである。

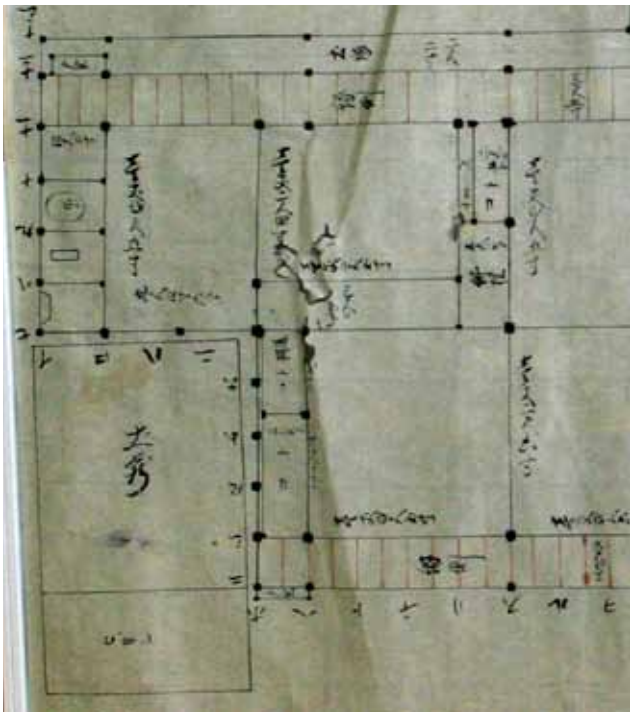
すなわち「本座敷」は、栂普請で、栂四方柾角柱 4.1 寸、青竹色土壁塗り。鴨居内法高 5.8 尺（付樋端の手法）、鳳凰の釘隠しに内法長押（具付 3.75 寸）を廻らしている。天井は屋久杉板羽重ね張り竿縁天井、高さ 8.6 尺（廻縁下端まで）。座敷正面の右側に 1 間床を構え、床と短折に 1 間の付書院を中廊下に張り出し、内法長押は床の中まで廻さず、手前柱に雛止めに取り付く。そして左に 1 間の床脇棚を設ける。襖は「次の間」にかけていずれも花鳥の彩色画（武生の日本画家、河野菱渚〈1844-1900〉筆）が描かれている。

床は蹴込式框床で、薄縁敷き、張付壁。栂四方柾（3.55 寸角）の床柱、桜の蹴込板（厚 5 分）に真塗の框床（成 4.4 寸× 2.3 寸）と杉の落掛（見付 2.2 寸）を取り合わせる。また、床脇も桜板（厚さ 1.6 寸）溜め漆塗の蹴込床（高さ 3.3 寸）に高くし、一方を地袋とした違棚、天袋を設け、床脇無目を長押上に高く上げるなど、格調の高い意匠を凝らす。1 間の付書院（卓板幅 9 寸、黒柿）は、4 枚障子に大きく障子欄間とし、床柱に黒柿の壁留りを入れ、やや大きく狆潜りを開けるなど重厚さを和らげる意匠が凝らされて、座敷の構成や意匠は古調であるが、端正で凛とした雰囲気の座敷をつくる。

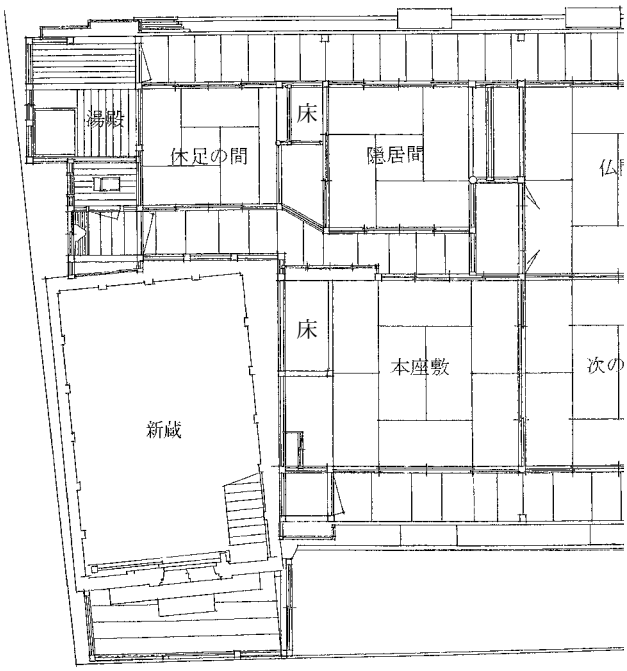
「次の間」には、藩主松平春嶽公筆の「冬青舎」（「冬青」はモチノキの漢名）の額が掛かる。

「本座敷」の控の間に当たる「休足の間」にも、それに相応した格式が数寄屋造りに試みられている。

「休足の間」は、四畳半敷き（間口 7.5 尺）。北側に上湯殿、便所を設けることによって南側を上座に、床の間とし、「本座敷」に従した座敷配置に中廊下側に 4 枚引違いの襖を入れる。柱は、栂 3.8 寸角柱、鴨居内法高 5.8 尺（付樋端の手法）、栂普請。付鴨居を入れた聚楽土塗壁。天井は、天井高 8.4 尺（廻縁下端まで）と高く、屋久杉板羽重ね張り竿縁天井である。正面間口いっぱいに欅の一枚板（幅 6.7 寸）を敷き込んで、黒檀六角ナグリの落掛けを渡した踏込み床とし、間中に杉磨き丸太床柱（径 3 寸）を立てる。そして、正面左側を壁を塗り廻した洞床風の軽快な蹴上床（杉板 1 寸厚）に、一方を付鴨居の壁とする。さらに、縁側の 4 枚腰障子のうちの床付き障子を平書院に仕立てることによって、書院を模した数寄屋風座敷とし、「休足の間」に相応しい寛いだ雰囲気に座敷の意匠を凝らしている。



明治 19 年「五十分壱之地絵図」（図⑧を部分拡大）



主屋 1 階 現況平面図（部分拡大）

「本座敷」

「休足の間」

Ⅸ　まとめ

福井県南越前町河野は、近世後期から近代にかけて最盛期を迎えた北前廻船業に成功し、巨大な富を得た船主たちが居を構えていた。そして、右近家、中村家、刀禰家などの船主館を中心に、河野浦は海村集落を形成し大いに繁栄した。中村家は、河野浦の中心部に立地して屋号を「中村三郎右衛門」のちに「中村三之丞」と称した。先祖は、河野浦「高持」の一家として上使宿を賜るが、江戸初期から起る北国廻船業に早くから乗り出し、幕末から明治中期にかけて激増する北前船主の中で、右近家とともに日本五大船主に挙げられる有力北前船商人となった。

中村家住宅は河野浦北ノ町の中心に位置する。背後に山地を負った狭小な地形を南北に貫く旧村道に沿って、山側東部はおよそ60㎝高い石積み基壇上に平地を構築し、間口24.4間海側に向けて、主屋と3層に望楼座敷を載せた新座敷（居宅）を設けている。そして、海側（西部）に旧村道に沿って土蔵を連ね、主屋式台正面に海に向かい格式高い薬医門を開く。

今回の調査では、棟札や墨書など建物の建築年代に直接関係する史料は見つかっていないが、建築的特徴や中村家文書などから、中村家住宅の建築年代は、主屋が明治20年(1887)、新座敷が大正2年(1913)と推定できる。また、正門や土蔵群の建築年代については判然としないが、新蔵については主屋普請に続く明治24年(1891)の建築である。そしてセドクラは、その古さから主屋と同時期のもので、大正2年の新座敷増築に合わせ風呂場やダイドコロ廻りが改造され、空地を置いて現位置に曳き屋されたとも推定できる。中村家住宅は、前述した近世期の上使宿普請、明治20年の「本家普請」、大正2年新座敷の増築と主屋一部の改築と云った時代普請に船主館としての屋敷構えが整い、地域の高い生活文化に依った近代和風建築をもたらした。

このように、中村家住宅は、自由な家作ができる明治期に入った明治20年の新築と、その後の増改築により成立したものであり、北前廻船稼業の富がもたらした普請による有力船主の屋敷構えを今によく伝えている。そして、次のような建築的特徴と価値を創り出している。それは船主住宅の遺構として価値が高く、特に重要な点を以下に指摘する。

① 旧村道を挟んだ東西の敷地割を占める河野浦集落の特徴的な敷地割は、敷地中央を貫く旧村道を挟んだ山側（東側）に石積み基壇上に平地を構築、海側向きにひときわ大きな間口の家構え（主屋）を造る。そして、その前方、道路幅3.5～2.4ｍ旧村道を挟んだ海側（西側）に旧村道に沿って土蔵を連ね、海側に正門を開く門構えは、河野浦の船主館の特徴的屋敷構えを捉えることができる。この屋敷構えは、潮風を遮り主屋を守る一方、海への畏敬の念を表した河野浦人の特徴的集落空間を生み出し、また、旧村道両側に開く主屋の家並みと土蔵構えがつくる河野浦特有の集落景観をつくりだしていることが分かる。こうした当家の繁栄がもたらした豪壮な家屋敷は、河野の地勢と地理的自然環境の中に、近代期の河野の地域文化を反映した特徴的な北前船主館を生み出している。

② 敷地に門や塀を廻らした表構えや主屋の間取りは農家型で、主屋は平入り切妻造り２階建、瓦葺き。棟には船主館特有の井桁三紋の巴瓦、北前船の帆を入れた雲型跨鬼に立浪型鳥衾瓦が載る。その主屋の間取りは、左手に上使宿の伝統を踏まえた構成の座敷廻りを採り、右手に板の間を配する構成で、主屋正面を旧村道より石積みの基壇上に玄関式台と大戸口が並ぶ格式の高い構えをつくり、河野浦特有の北前船主型の家屋敷を創り出している。

③ 主屋２階建の式台、中の間、オイエ、ナンド、板の間は、伝統的な農家の上普請の象徴である欅普請。一方、座敷、次の間、仏間、隠居間、休足の間と望楼を持つ新座敷は、船主が好んだ栂普請で、材料の用い方、建築仕様の面に顕著な特徴が認められ、その施工技術の高さがよく現れている。

④ 新座敷は、1・2層が客間座敷、それに海を望む表側に３層目望楼が載る瓦葺寄棟造り３階建、栂普請。高度な技術を駆使した欅の良材の洋風階段とともに、数寄屋造りの客間座敷や軽快で洒落た意匠の望楼座敷には、大正普請の離れ建物を象徴するように、近代期の気風に満ちた開放的で寛いだ雰囲気が醸成されている。一方、農家型を基調としたダイドコロ廻りの豪壮な造りは、本座敷の意匠にも上使宿普請に通じた保守的な古調を留め、近代黎明期の時代風潮の一面を窺わせる。そして、あくまで伝統的和風を基調としながら、それまでの武士住宅、町屋、数寄屋建築、洋風建築などを取り入れた近代和風建築に、贅を尽くし、高度な建築技術と建築意匠に到達した船主館を捉えることができるのである。

中村家住宅は、現在にいたるまで北前船主の居宅として、適宜増改築の時代普請が作り出した家屋敷構えであるが、全体として旧規の姿を損ねることなく、建築当初の姿をよくとどめているといえる。むしろ、歴史的建造物としての価値を確保しながら、近年まで住宅として利用されていたことは積極的に評価できよう。

この他に、船主館中村家住宅の周辺には右近家住宅、刀禰家住宅などの船主館とともに形成された北前船集落が歴史遺産としてよく残り、その一帯が現在も歴史遺産を活かした生活が営なまれていることも注目される。中村家住宅がこうした歴史的環境の中核をなしていることも見逃せない点である。

北前船の帆を入れた鬼瓦

参考文献

河野村産業観光課　『海への祈り』　1991 年

日本福祉大学知多半島総合研究所　『北前船と日本海の時代－第 3 回「西廻り」航路フォーラム－』1997 年

加賀市教育委員会　『加賀市橋立の町並み－伝統的建造物群保存対策調査報告書－』　2004 年

牧野隆信　『日本海の商船－北前船とそのふる里－』　1985 年

河野村誌編さん委員会　『河野村誌』　1984 年

福井県　『福井県史　資料編 14 －建築・絵画・彫刻等－』　1989 年

福井県教育委員会　『福井県の近代和風建築－福井県近代和風建築総合調査報告書－』　2012 年

図　　版

(1) 主屋・新座敷

(2) セドクラ・新座敷（背後から見る）

(3) 主屋南側の屋根

PL.10

(1) 主屋正面大戸口

(2) 式台

(1) 新蔵

(2) セドクラ

(3) バンゲ蔵・西蔵

(4) 西蔵正面

PL.12

(1) 前蔵・米蔵

(2) 浜蔵・塩物蔵

(1) 正門

(2) 北塀

(3) 石垣（新座敷側）

(1) 河野浦集落の景観（手前：南ノ町、奥：北ノ町）

(2) 海側から見た屋敷地

(1) ニワ（ダイドコロ方向を見る）

(2) 中の間（式台方向を見る）

(1) 次の間（本座敷方向を見る）

(2) 本座敷

(1) 前庭・西側縁側

(2) 仏間

PL.18

(1) 隠居間

(2) 湯殿

(3) ダイドコロ（オイエ方向を見る）

(1) オイエ（ナンド方向を見る）

(2) ナンド（背面北側を見る）

(3) コエン（背面北側を見る）

(4) 庭園・東側縁側

(1) 表 2 階 座敷 8 帖

(2) 表 2 階 座敷 6 帖

(1) 東 2 階 座敷 6 帖

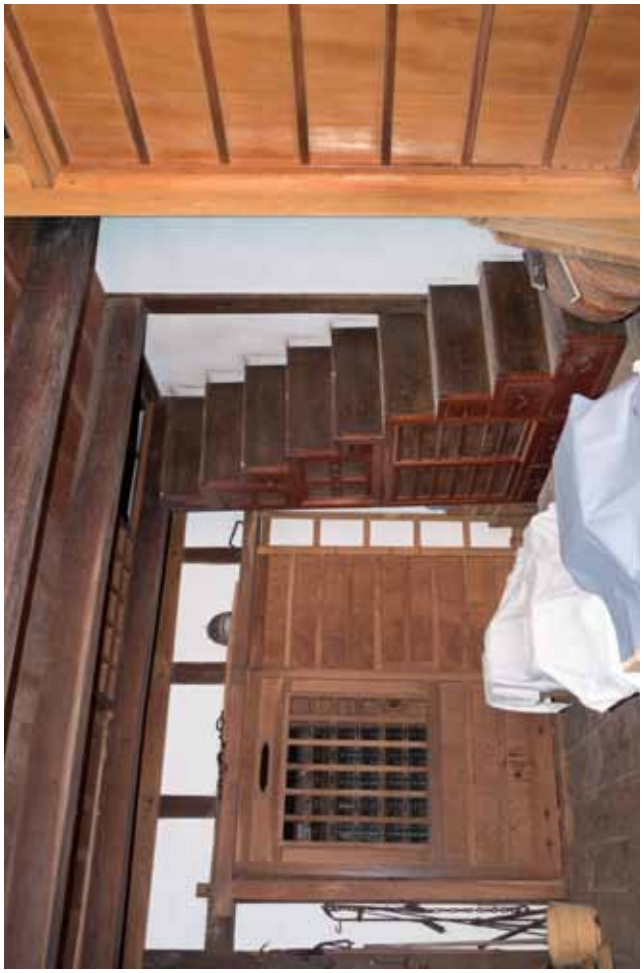
(2) ミズヤ・洋風階段（新座敷方向を見る）

(1) 新座敷 1 階 主座敷

(2) 新座敷 2 階 次の間

(1) 新座敷 2 階 主座敷

(2) 新座敷 3 階 望楼座敷



(2) セドクラ1階（山側を見る）

(4) 西蔵2階（海側を見る）

(1) 新蔵2階（田村通側を見る）

(3) 西蔵1階（田村通側を見る）

(1) バンゲ蔵2階（旧村道側を見る）

(2) 前蔵2階（旧村道側を見る）

(3) 米蔵1階（西側を見る）

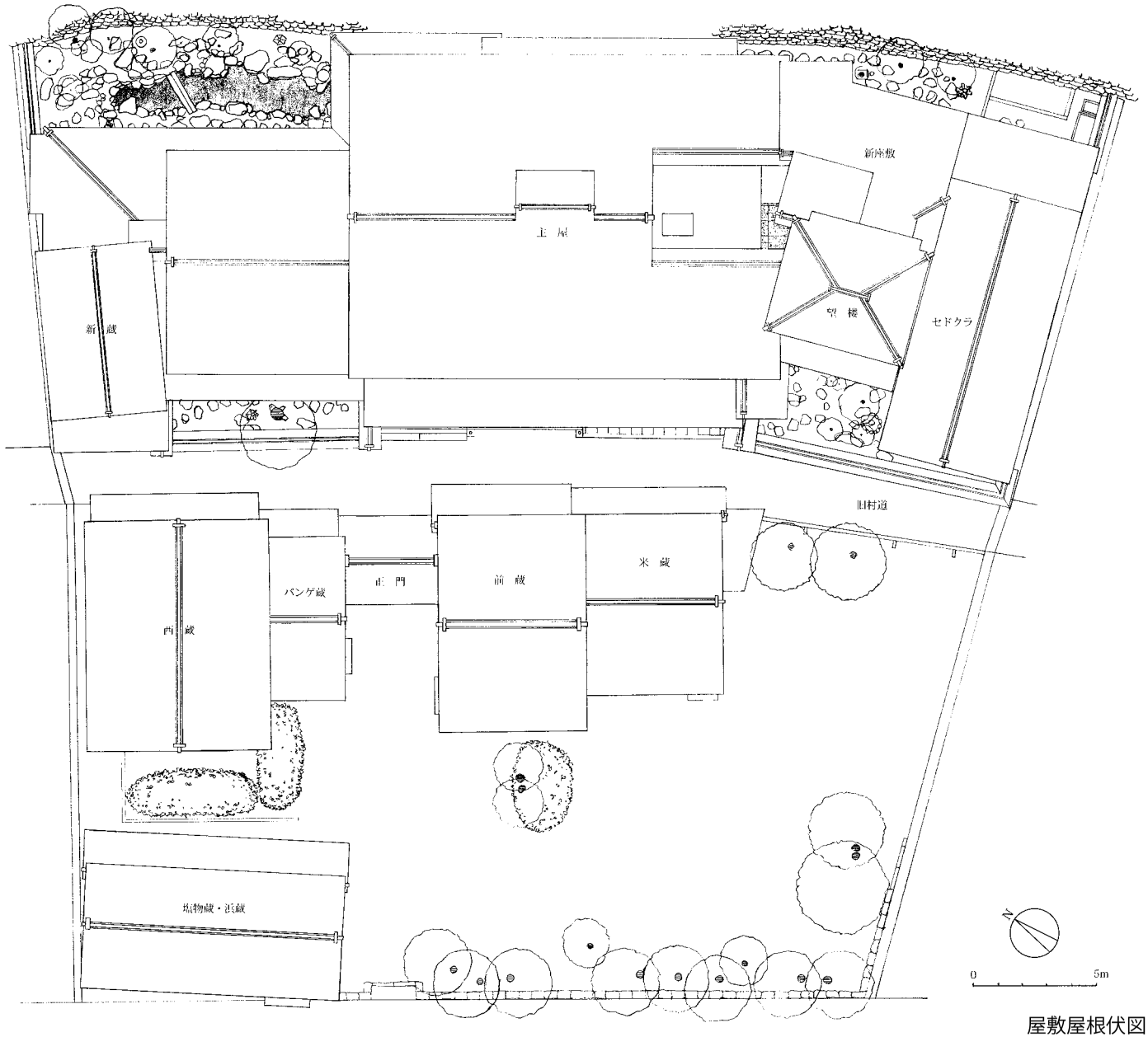
(4) 米蔵2階（西側を見る）

(1) 塩物蔵 1 階（北側を見る）

(2) 浜蔵 2 階（北側を見る）

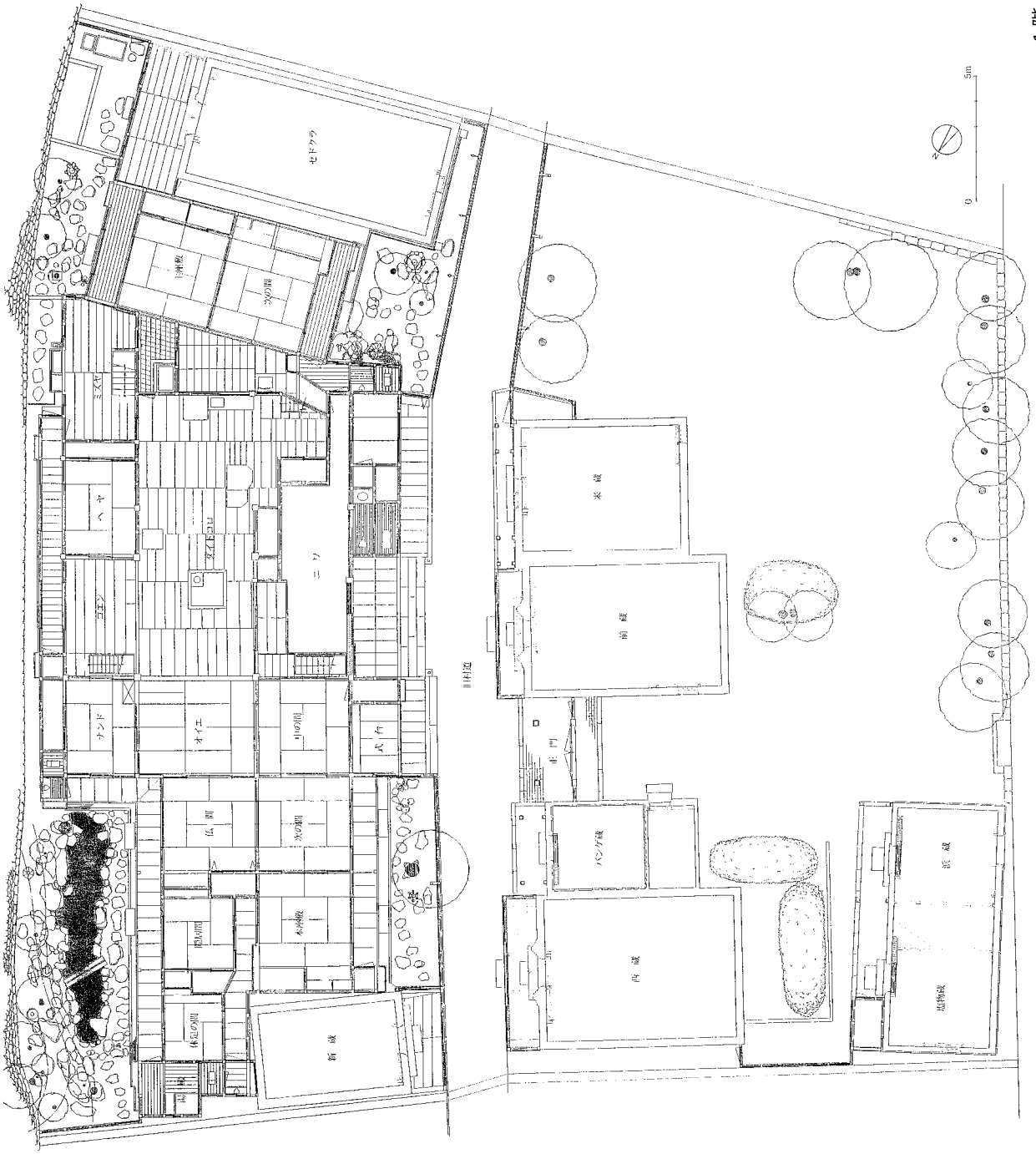
(3) バンゲ蔵 納戸

(4) セドクラ正面

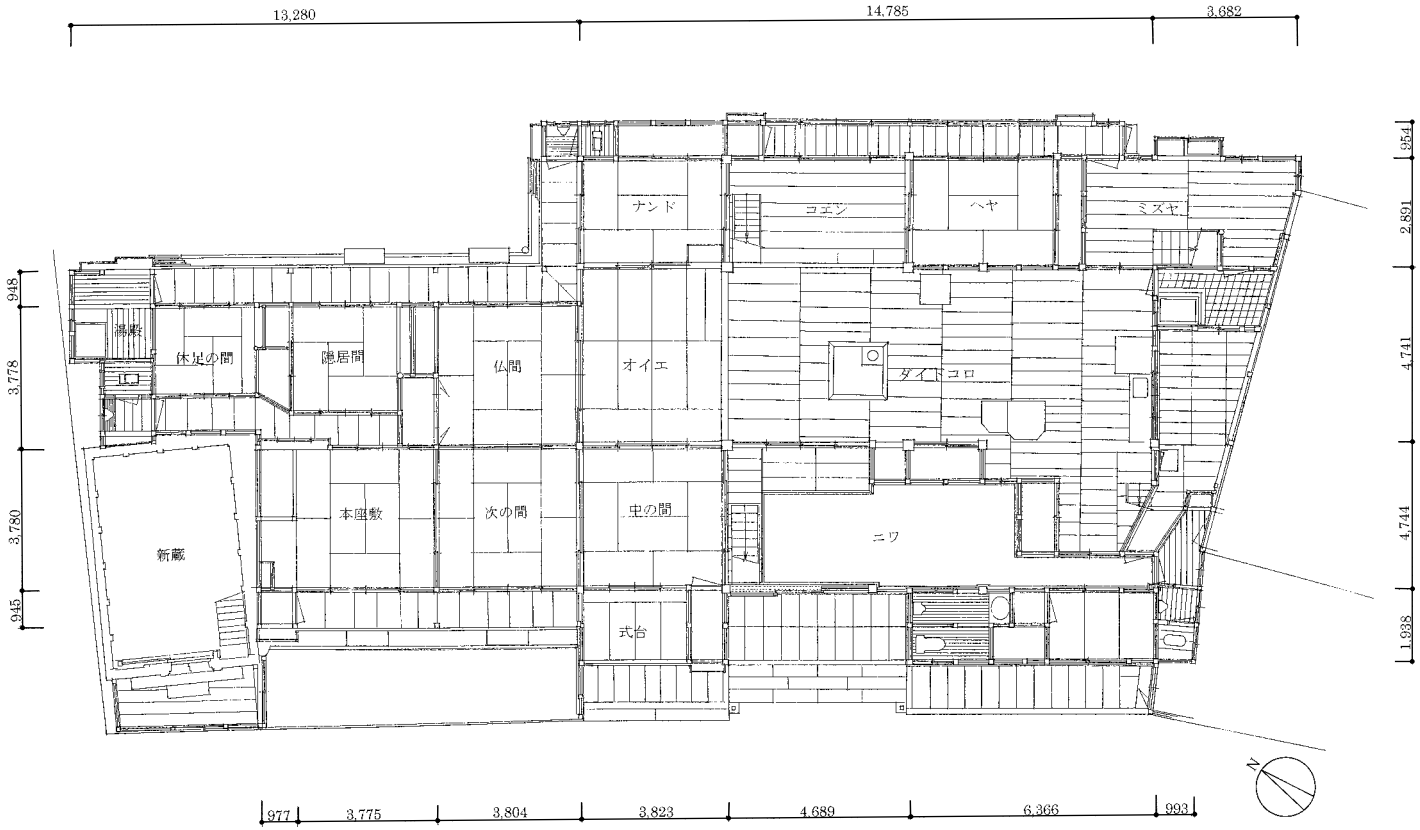


屋敷屋根伏図（配置図）（1/250）

PL.27

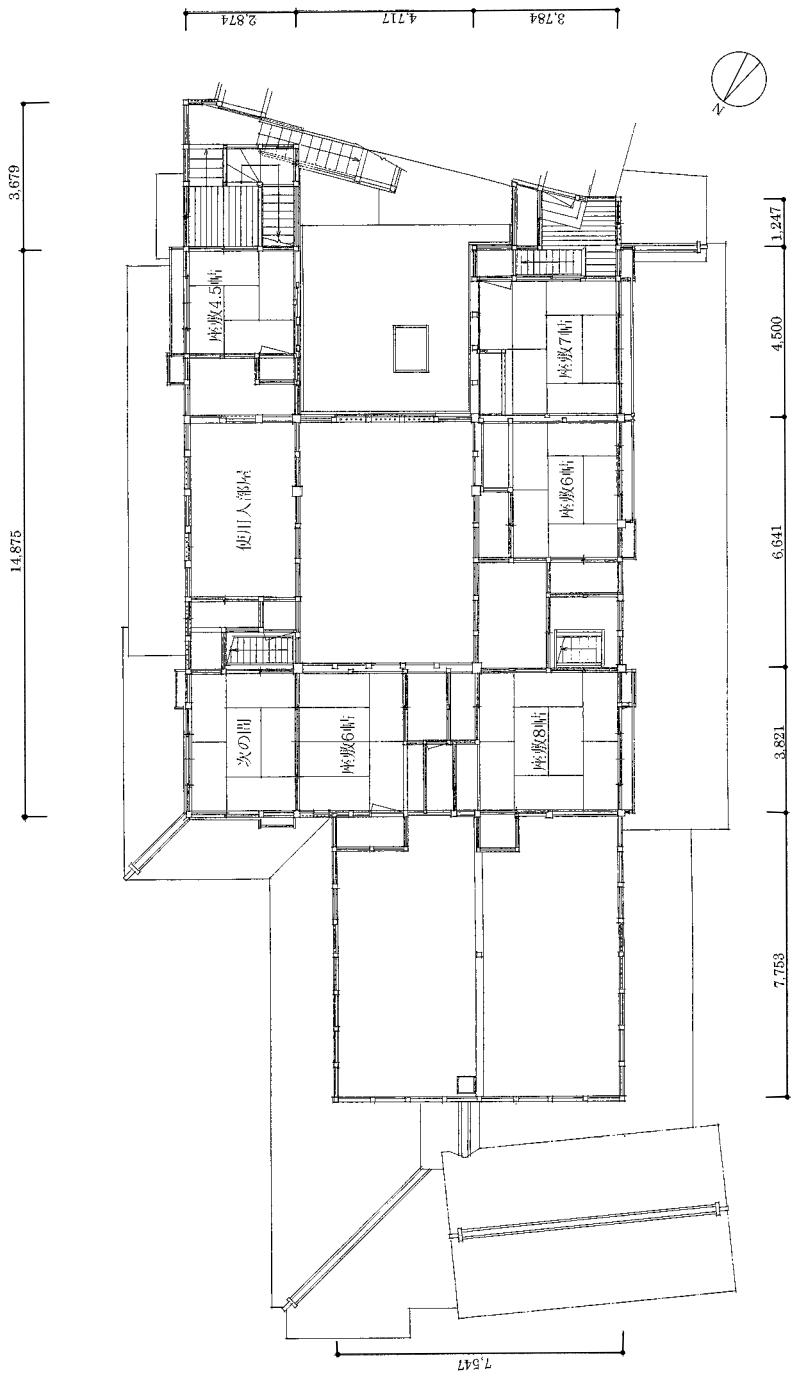


1階 全体平面図（1/250）

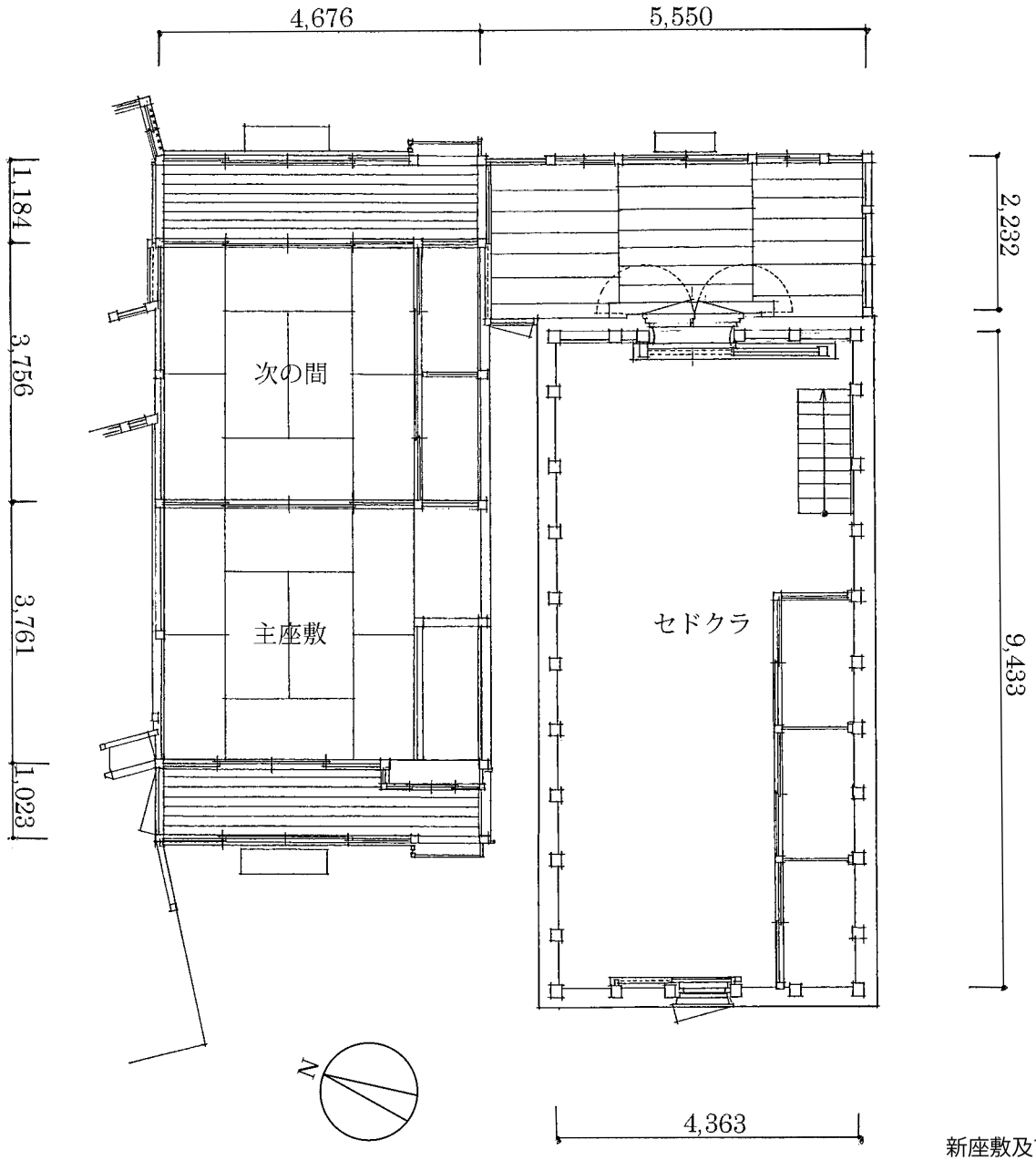


主屋１階 平面図（1/200）

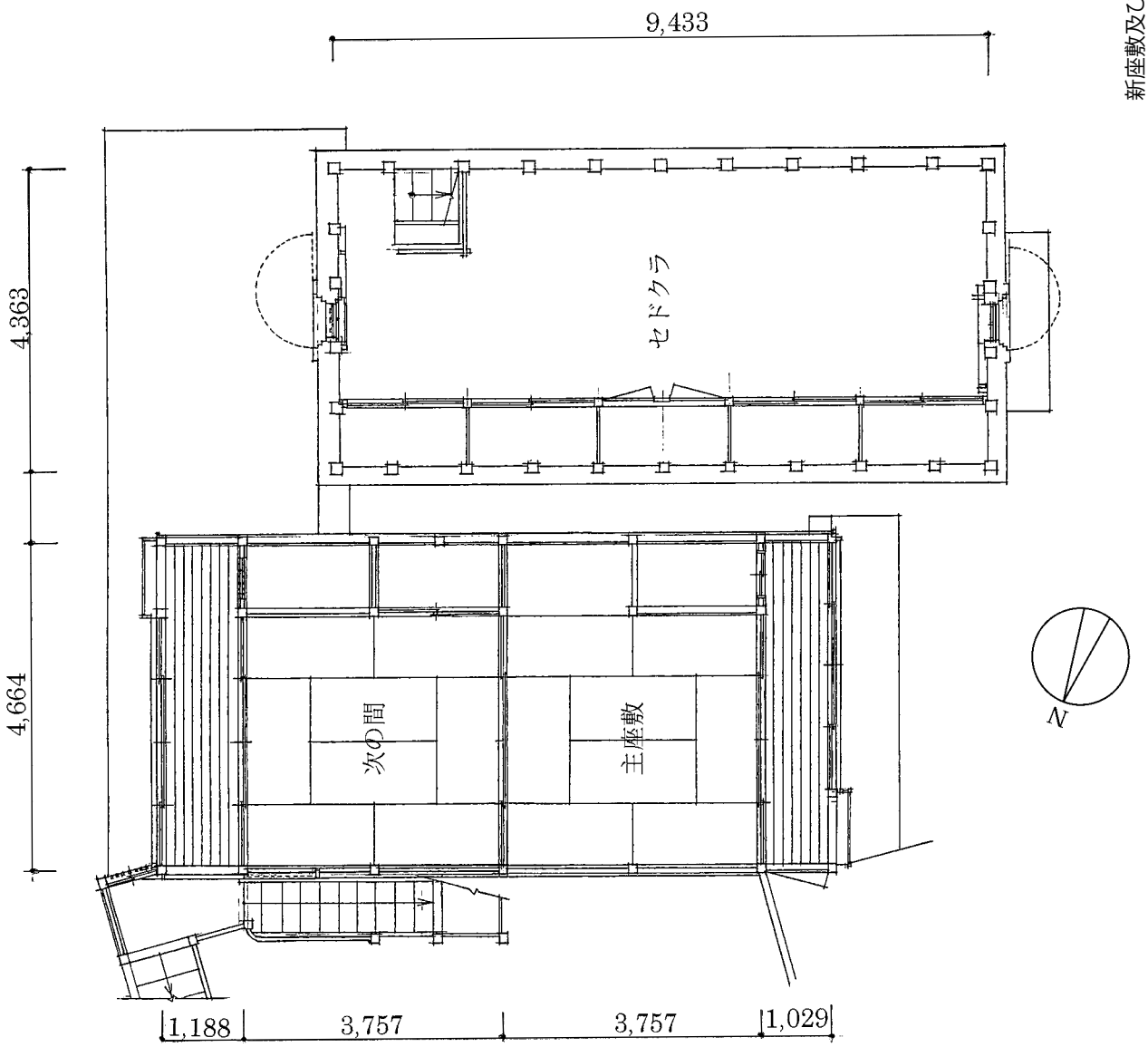
PL.29



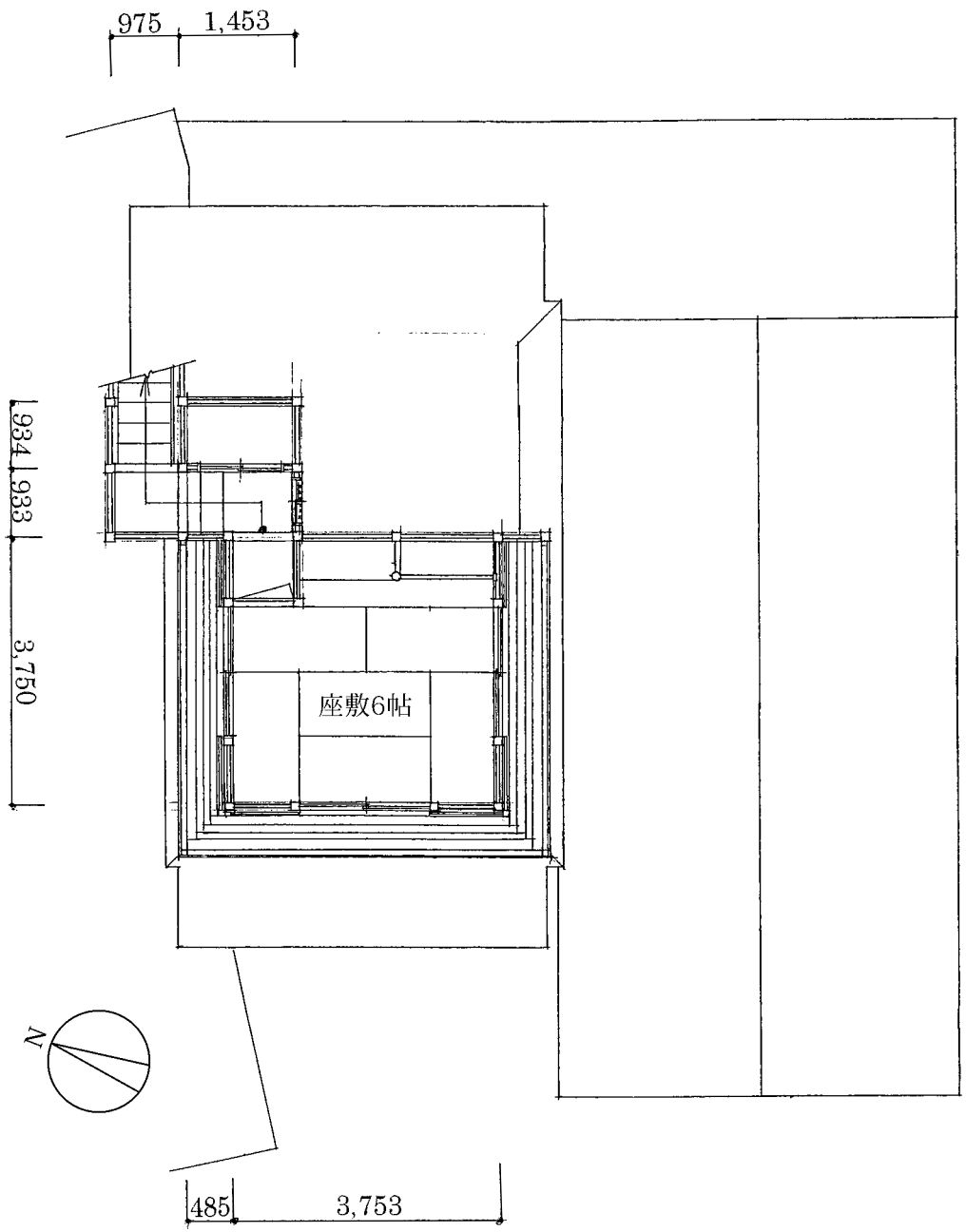
主屋 2 階 平面図（1/200）



新座敷及びセドクラ１階平面図（1/100）

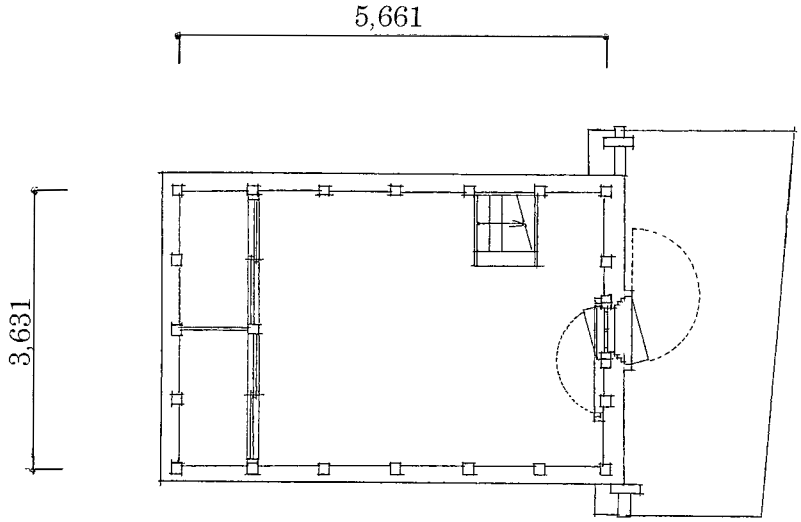


新座敷及びセドクラ２階平面図（1/100）

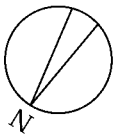


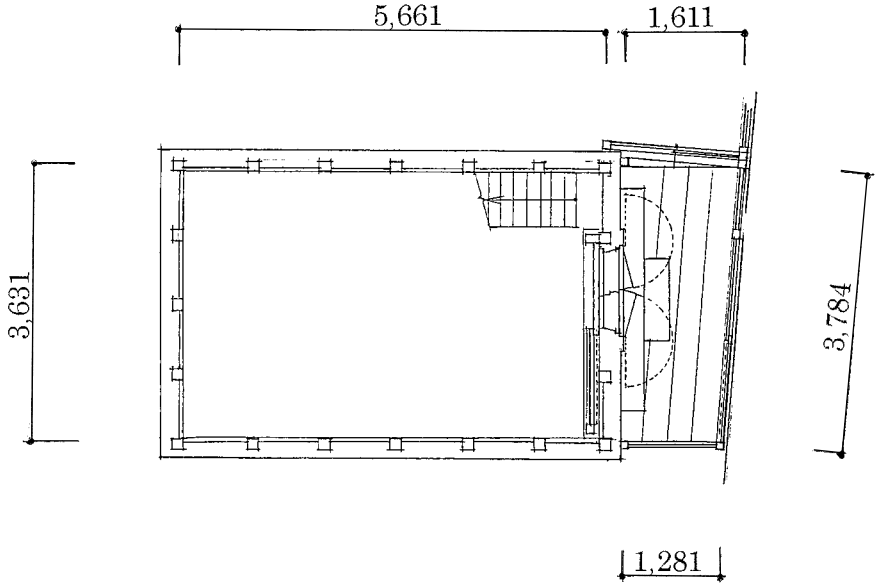
新座敷 3 階 平面図（1/100）

新蔵 平面図（1/100）

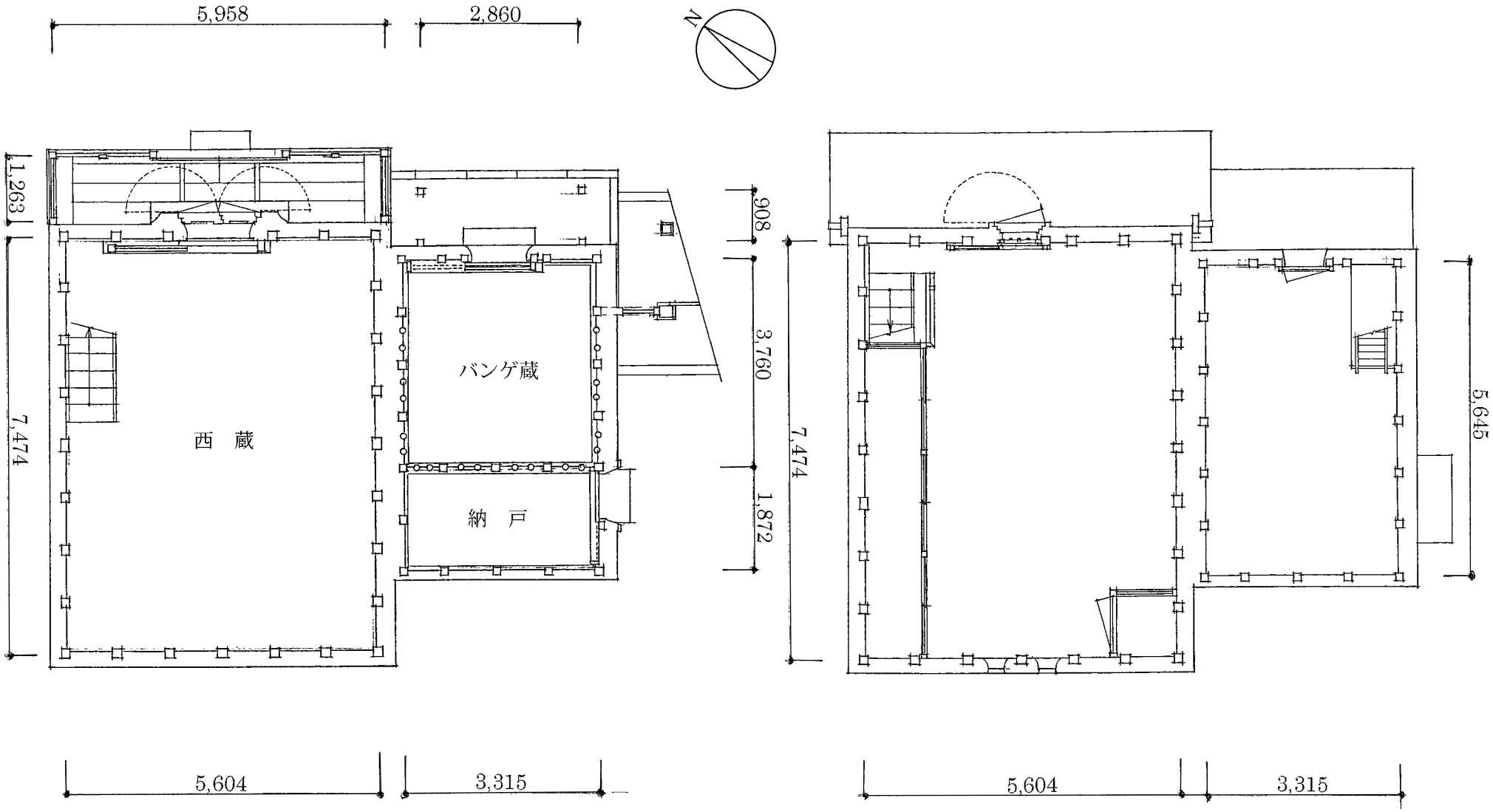


2 階





1 階

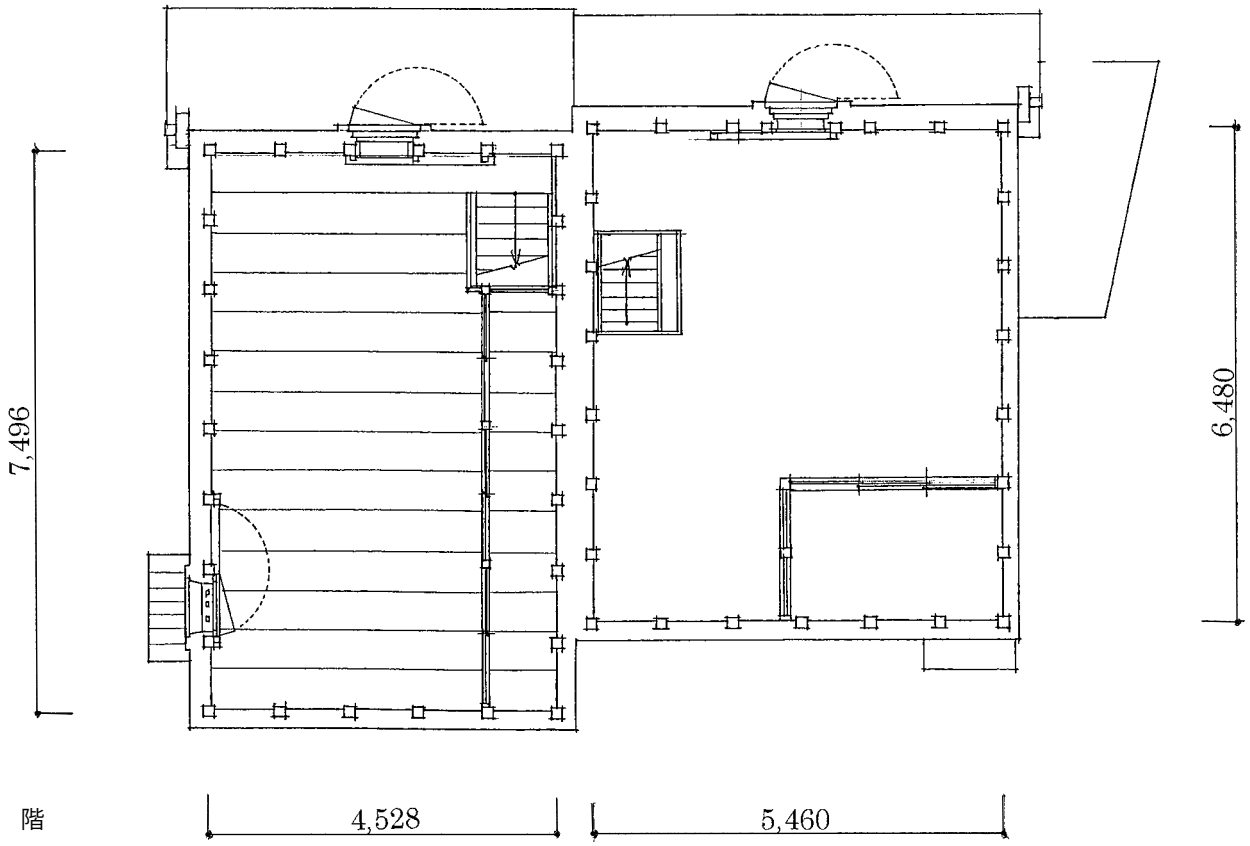


1　階

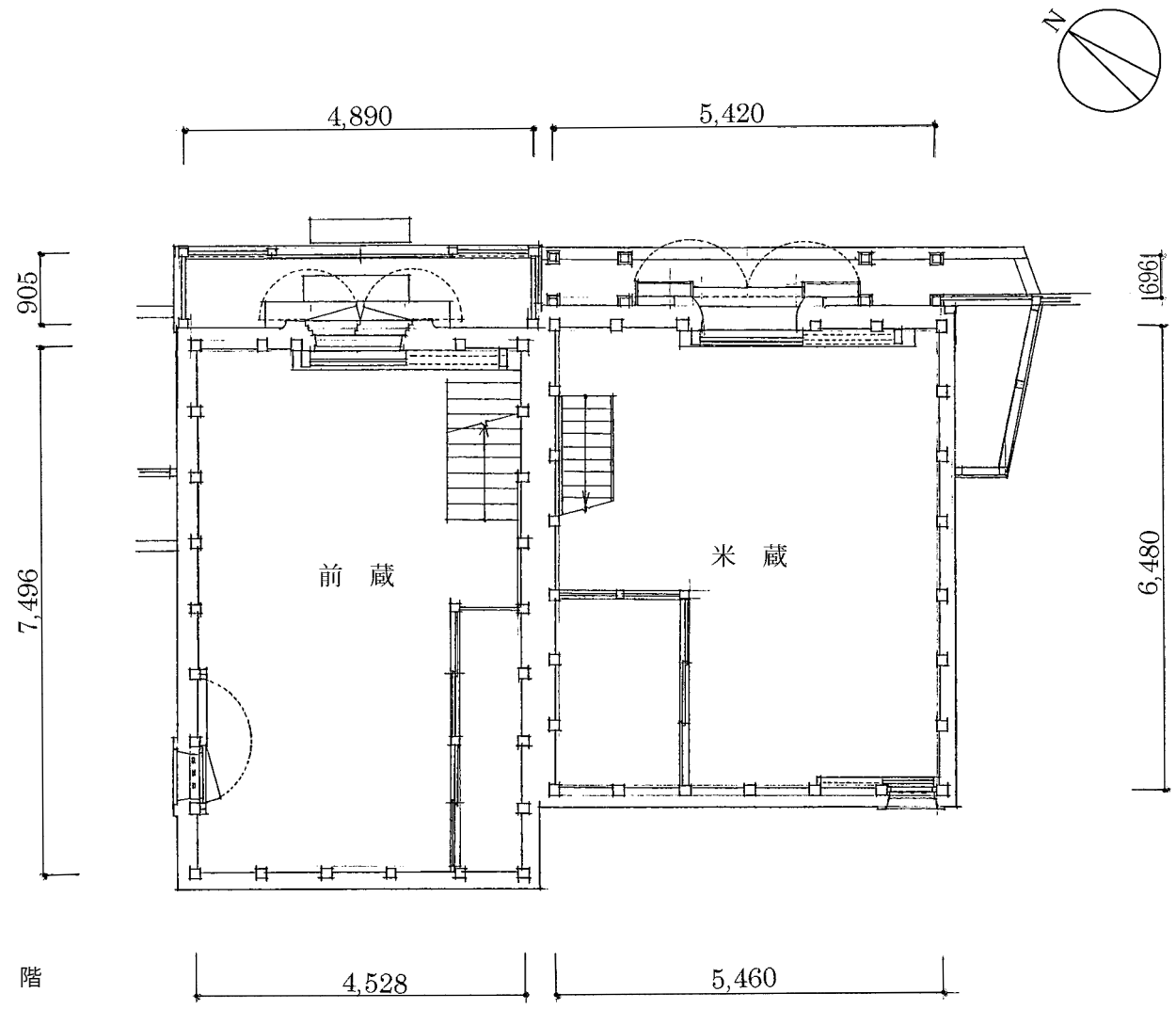
2　階

PL.35

西蔵及びバンゲ蔵 平面図（1/100）

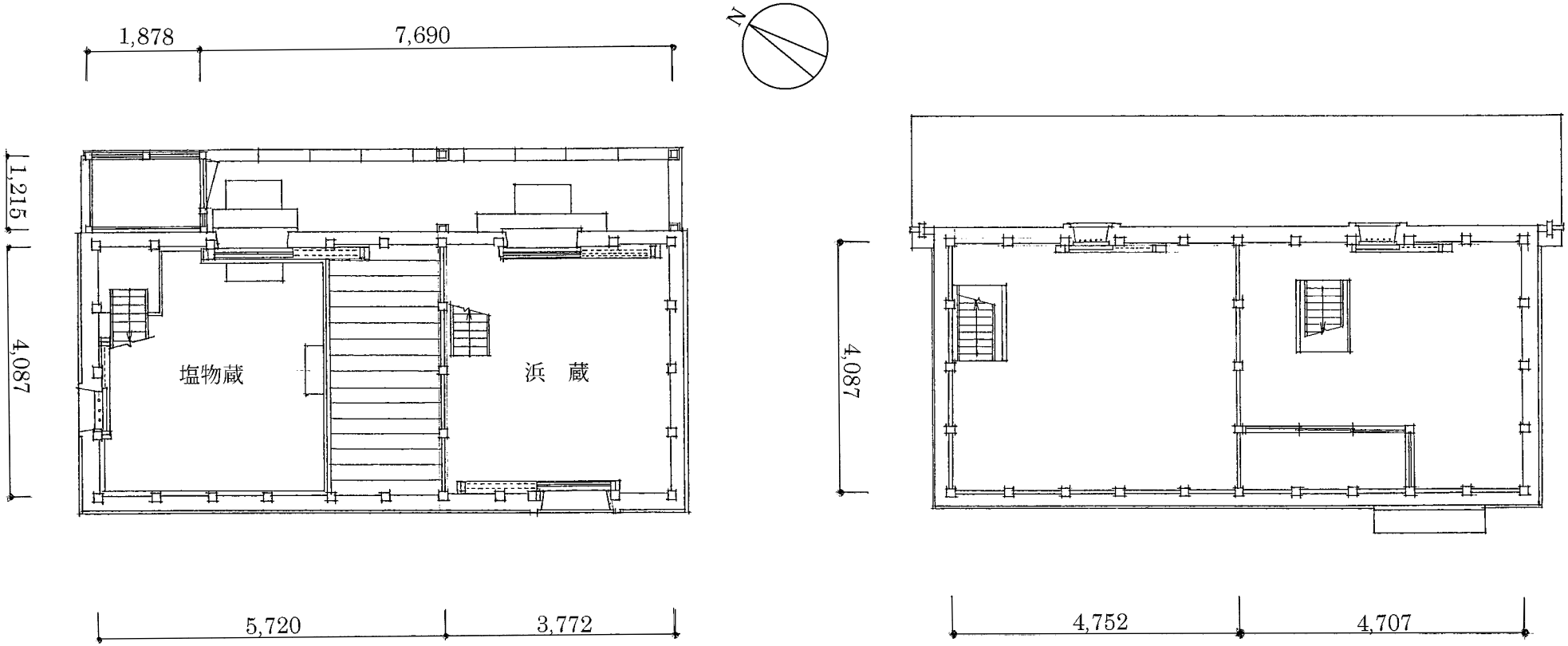


2 階



1 階

前蔵及び米蔵 平面図（1/100）

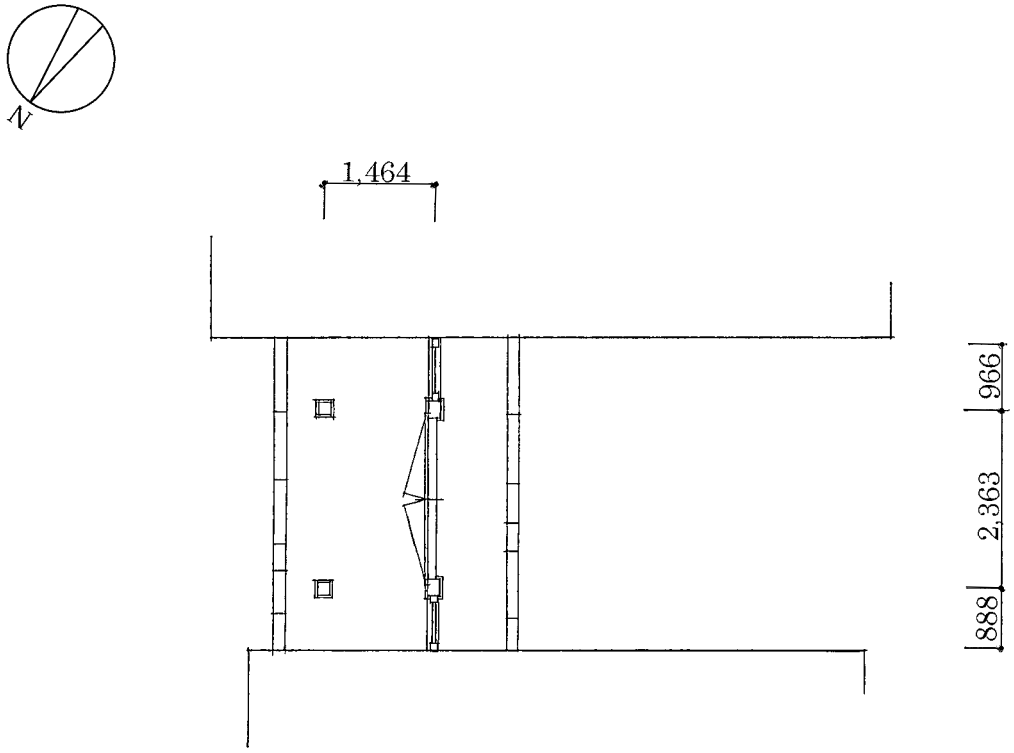


1　階

2　階

塩物蔵及び浜蔵 平面図（1/100）

正門 平面図（1/100）



南越前町文化財調査報告　第 4 集

中村家住宅調査報告書

平成 27 年 2 月　発行

編集・発行　南越前町教育委員会事務局
福井県南条郡南越前町牧谷 29-15-1
TEL 0778-47-8005

印　　刷　創文堂印刷株式会社
福井県福井市問屋町 1 丁目 7 番地
TEL 0776-22-1313